九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

十六・十七世紀中国における稲の種類、品種の特性とその地域性

川勝, 守
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/24613

出版情報：九州大学東洋史論集. 19, pp.1-56, 1991-01-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

十六・十七世紀中国における稲の種類、品種の特性とその地域性

川勝　守

序

中国の稲の種類や品種に関する研究は、加藤繁氏[1]によって緒につき、周藤吉之[2]、天野元之助[3]両氏に継承された[4]。加藤氏[5]は、後漢の『説文解字』や宋の『爾雅翼』などの字書を使って、稲の種類には稲の黏せざるもの秔＝粳（うるち）と、黏するもの糯（糠・もちごめ）とがあり、また、最も黏せざるものは『説文』では穄といったが、揚子方言では江南で粳を秈といったこともあり、これが後世秈が穄の意味に用いられ、穄の字は廃れたという。南宋羅願『爾雅翼』には、稲の黏せざるものを秔、黏するものを糯、秔に比して小にして最も黏せざるものを秈とし、なお、秈を早稲、粳を晩稲とした。宋では占城稲の早稲が輸入栽培されたが、『爾雅翼』ではこれを在来種と区別して特に説明している。降って明清時代になると、宋代では区別されていた秈と占城稲が同一に見なされ、占城稲をも秈の一種と見なされることなどが地方によって行われた。秔と秈が一括され、うるちをすべて黏という地方もあった。また清末には秈を尖とも書いたという。

加藤氏は、次に稲の小さい区別、即ち品種の成立にふれ、晋の郭義恭の『広志』に見えるもの（但し、その原本は既に滅び、『斉民要術』などの引用によってのみ知られるという）を初出とし、降って宋―明に及ぶ。明では、蘇州呉県の人黄省曾（号五嶽）の『理生玉鏡稲品』に見える粳十八種、糯十三種、合計三十一種の稲の品種が、まず王鏊修、正徳『姑蘇志』土産の記事を基とし、増補を施したものとし、さらに宋代地志を検討比較して、三十一種中二十三種が宋の地方志中にみえるとした。また、品種名に与えられた属性の説明につき宋と明の文献を対照して、簡詳の違いがあるも両者は大体一致するとし、次に成熟期に関する記述を対照して各品種を早・中・晩三稲に分けている。早稲は稲の六、七月に熟するもの、中稲

は八月、晩稲は九、十月に熟するものとする。

早稲　麦争場・秋風糯・趕陳糯・香秔（宋の香稲）・香穲

中稲　早白稲・閃西風・小娘糯

晩稲　箭子稲・紅蓮稲・穲稉稲・師姑稲・晩白稲・羊脂稲・臙脂稲・矮糯・青稈糯

次に宋明の文献から稲の諸品種の属性を諸観点より分類すると、

一、粒の大小。紅蓮稲・雪裏揀・閃西風・矮糯などは粒が大きく、香秔・香穲は小さい。

二、粒の長、円、尖。箭子稲・穲稉稲・金釵糯・趕陳糯などは粒長く、秋風糯は円く、金城稲は尖。

三、粒の白、赤、斑、黒（色）。箭子稲・師姑秔・雪裏揀・閃西風は白く、紅蓮糯は赤、穲稉稲・香穲は斑、烏口稲は黒。

四、粒の香の高いもの。箭子稲・香秔・香穲。

五、味の甘。箭子稲が最、最も甘くないのは烏口稲あたり。

六、芒の有無。芒の色の紅、白。稲は芒の有るのが普通、だが師姑秔・鉄梗糯などは無芒。紅蓮稲・青稈糯の芒は紅、秋風糯の芒は白い。

七、稈が特に勁いもの、比較的弱いもの、長短など区別がある。特に勁いものは鉄梗糯、短いものは矮糯。

そして、それら各種の品種がいつ成立したか、北宋時代、唐代、さらに魏晋南北朝と各文献史料を検討していく。本研究の結論を加藤氏は次のように述べている。中国の稲は、初は専ら早稲であり、春早く蒔かれ、秋早く収穫せられたが、ついで中稲、晩稲に属する多くの品種が作られ、味のよい米が多量に生産されることとなり、ついで占城の早稲が輸入栽培され、これと従来の中稲、晩稲と結合せて稲の二毛作が行われるようになり、その産額は更に増加した。そうして中・晩稲の諸品種が成立したのは唐宋の時代であって、占城稲の輸入せられたのは宋代、稲の二毛作が行われたのは明代であったようである、という。

稲の種類、品種の特性についての加藤氏の研究成果は、今日でもなお依るべきところが多い。それに続いて周藤吉之氏の「南宋に於ける稲の種類と品種の地域性」は、後魏賈思勰の『斉民要術』以来、宋元代地方志、文集などの文献史料を精査し、明初の洪武『蘇州府志』巻四十一、土産、稲の記事にみえる品種を検討している。周藤氏の研究が加藤氏の研究に独創

を加えた最重要点は、稲の種類や品種のあり様が地域によってそれらの重要性を異にしていたという点である。その成果を表にしてみると次の如くである。

〔早・中・晩〕					〔秈・占城稲・杭稲・糯稲〕			
路	州分	構成	優勢		州分	構成	優勢	
浙西路		早・晚	晚			杭・占城	杭	
浙東路	紹興・明州	早・晚	早		（常州）	占城・杭	小禾（米）同率	
		早・中・晚	中					
江南東西路		早・晚	早	秋税は晚稲、早稲納も有		占城・杭	占城稲	秋糧も占城稲、但し一割増
荆湖南北路		早・晚	早	晚稲は租税用	（撫州）湖南（潭州）		脱稲	政府買上杭稲は租税用
四川路		早・晚				粳稲	占城稲	
淮南路		早・晚				杭・占城	占城稲	占城米・粳米流通
福建路		早・晚	早・晚	湖田早晚二期作		杭・占城	杭・占城	杭一年一熟占城稲は金城米といい流通
広南路								
広南西路	欽州	早・晚早・晚	早・晚早・晚	一年三収				

上段の早晚稲区分で注意すべき地方は、浙東路の紹興府や明州（寧波）では早稲・晚稲の外に中稲というものが区別され、しかも中稲の栽培が最も重視されていた。このように早・中・晚の三稲に分けることは、南宋では浙西路の臨安府にも及んでいたが、元より明初には浙西路の蘇州でもこれが採用された。次に早・晚稲区分と納税との関係であるが、江南東西路では、一般に早稲が多く作られ、秋糧（秋苗）は晚稲を納めるのが原則であったが、これらの路では早稲で納めさせることもあった。なお、江南東西路にも晚稲の多く作られる州県もあったという。長江中流域の荆湖南北路でも、早稲が多く作られ

たが、租税用には晩稲が作られたという。早・晩の優勢度を言えば、浙西路が晩稲、浙東路の紹興・寧波に中稲が多いほかは大体早稲であり、これは次の占城稲優勢に照応する。なお、福建、広南両路には早稲・晩稲の組合わせによる二期作や、早・晩早・晩稲の一年三収があった。

宋代新渡の占城稲は当初早・中・晩の三種があったが、一般には早稲で、秈稲の中に入れられ、秈・占城稲は秔稲（大米）に対して小禾（小米）といわれることもあった。秈稲は栽培が易く、耐旱かつ地味も悪い所でもよかったのに対し、秔稲は肥地でなければ作られなかった。しかも秔稲は穀（籾米）より米＝白米を得ることが少なく、秈、占城稲は米を得ることが多かった。しかし、秈・占城稲は長く保存が利かない欠点があったので、政府に納める租税は秔・粳米に限られていた。このため粳米はその価格が高く、租税として政府に納めるほか、上戸の食糧となっていた。秈・占城稲はその価格が低廉であるため、中下の戸の食糧となっていた。これらの秈・占城稲と秔稲の栽培も各地域によって、その重要性を異にしていたが、それは大体において前述の早稲・晩稲の地域的な相違と一致していた。

浙西路では秈稲より秔稲が多く作られた。もっとも常州などでは小禾（小米）が多く作られていた。浙東路では占城稲と秔稲がほとんど同じ程度に作られていた。江南東西路では占城稲が多く作られて、秔稲はあまり多く作られなかった。そこで秋糧も占城稲で納めるのを許すこともあった。ただその場合には占城米は粳米に一割増して徴収された。そして江南東西路では占城米は商人によってかなり広い範囲に流通していた。ただし、江西路の撫州のように秔稲の多く作られた処もあった。荆湖南北路でも占城稲が多く作られて、秔稲はあまり多く作られなかった。湖南路の潭州のような処では秔稲は租税を納めるだけで、富家も細民も占城稲に頼っていたらしい。淮南路でも占城稲が多く作られていたが、秔稲もかなり作られた。四川でも粳稲が作られた。福建・広南路でも占城稲と秔稲が作られ、占城稲は一年両熟、秔稲は一年一熟だった。ここでも占城稲は金城米といい各地に流通していた。また、糯稲は各地で作られていたが、これは主に酒を造る原料とされ、宋では酒は専売となっていたので、秋税の一部を糯米でもって折納させていた。

次に稲の品種について、『斉民要術』所載の品種の如きは宋代にはあまり残らず、宋特に南宋では、稲の品種は秈・占城稲・秔稲、糯稲にわたって多くの品種が育成された。しかも南宋では各地域によって、これら三稲の重要度が異なっていたので、秈・占城稲の多く作られた処では比較的にその品種が多く、秔稲の重要な処ではその品種が頗る多く育成されていた。

浙西の平江府（蘇州）では杭稲の品種が頗る多く、その中には箭子稲（長腰米）を始め多くの優良品種があったが、秈・占城稲の品種は僅かしかなかった。糯稲の品種もかなり多く見え、これらには酒を醸造するに適するものとそうでないものとがあった。平江府のこれら三稲の品種は合計五十四種あったが、それらの多くは元より明初に至る間に淘汰されていた、と指摘する。これらは本章で明清期の稲の種類、品種を考察する際、極めて重要な前提課題となるものである。

以下、加藤・周藤両氏の研究を手掛かりとして、明清期、十六―十七世紀の稲の種類、品種[6]について、(Ⅰ)長江下流デルタ〔江蘇江南・浙江北部〕、(Ⅱ)デルタ周辺〔江蘇江北・安徽〕、(Ⅲ)江西、(Ⅳ)湖広〔湖北・湖南〕、(Ⅴ)四川、附雲南、貴州、(Ⅵ)東南海岸〔浙江南部・福建〕、(Ⅶ)両広〔広東・広西〕に分って[7]、各地方志などを調査した。

(Ⅰ)長江下流デルタ〔江蘇江南・浙江北部〕

明清期に北京上供の白糧粳米[8]の主要産地である。その中心、地域首都である蘇州府の、

A1、洪武『蘇州府志』巻四十一、土産、稲に、

杭①箭子稲②香子稲（香穲）③紅蓮稲④穲稗稲⑤六十日稲⑥赤稲⑦稲公揀⑧早稲⑨麦争場稲⑩小秈禾⑪早白稲⑫閃西風稲⑬紫芒稲⑭雪裏揀稲⑮早烏稲⑯烏鬚稲⑰師姑粳稲⑱上稈青稲⑲金城稲⑳烏口稲㉑烏兒稲

糯①謾官糯稲②金釵糯稲②青稈糯稲④蘆黄糯稲⑤師姑糯稲⑥羊鬚糯⑦川粳糯⑧矮兒糯⑨鉄粳早黄糯⑩趕陳糯

これを基準[9]として増減をみると、

A2、正徳『姑蘇志』巻十四土産には、

杭①③④⑭⑰⑪⑨⑤㉒百日赤⑲⑳㉓再熟稲⑧㉔中秋稲⑬㉕秕杷紅㉖下馬看

糯②⑪閃西風（一名早中秋）⑫羊脂糯③⑬秋風糯⑩⑧⑭鵝脂糯⑦⑮虎皮糯⑥⑯臙脂糯

洪武『蘇州府志』土産と比較すると、杭では②香子稲（香穲）⑥赤稲⑦稲公揀⑩小秈禾⑫閃西風稲⑮早烏稲⑯烏鬚稲⑱上稈青稲㉑烏兒稲の九種が減じ、㉒百日赤㉓再熟稲㉔中秋稲㉕秕杷紅㉖下馬看の五種が増え、差引き四種減じている。増加分中、㉒百日秋㉓再熟稲㉖下馬看は、南宋の平江府崑山県地志淳祐『玉峰志』巻下土産・稲にその名が見え、新出は、中秋稲、秕杷紅のみである。次に糯では①謾官糯④蘆黄糯⑤師姑糯⑨鉄粳早黄糯の四種が無く、⑪閃西風（早中秋）⑫羊脂糯⑬秋風糯⑭鵝脂糯⑮虎皮糯⑯臙脂糯が加わった。この内、⑫羊脂糯は至順『鎮江志』巻四土貢、淳熙『新安志』巻二物産に、⑬秋

風糯は南宋の蘇州常熟県『琴川志』巻九敍産に、⑮虎皮糯は浙江の明州・南宋寶慶『四明志』敍産に⑯臙脂糯は福建の南宋淳熙『三山志』巻四一物産にそれぞれ名が見えている。新出は⑪、⑭であるが、⑪は秔にその名があり、或は混合かとも思えるので、結局⑭のみ新出である。

明の蘇州呉県の人黄省曾（一四九〇―一五四〇）『理生玉鏡稲品』の稲の品種が前掲『姑蘇志』によったことは既に加藤繁氏の指摘するところであるが、次に、A3『理生玉鏡稲品』の品種も挙げると、

秔①③⑤㉗八十日稲㉒⑲④⑭⑰⑪㉘晩白稲（蘆花稲）⑨⑳㉓㉔（松江―早中秋＝閃西風）⑬㉖（三朝斉）②㉙三穂千

糯②⑫⑯（太平―硃砂糯）⑮⑩（太平―雀不覚・秈糯）⑧③④（湖州―泥裏変）⑬（瞞官糯＝①、松江―冷粒糯）⑰小娘

糯⑱烏香糯⑨⑲馬鬃糯

A3『理生玉鏡稲品』が正徳『姑蘇志』と異なる点は、蘇州以外の地の稲の品種に言及している点である。なお、小異を言えば、⑧早稲、㉕枇杷紅が無く、㉗八十日稲㉘晩白稲㉙三穂千が加わった。糯では⑪閃西風、⑭鵝脂糯⑦川粳糯が無く、⑰小娘糯、⑱烏香糯、⑲馬鬃糯が加わった。このうち㉗八十日稲は至順『鎮江志』巻四土貢等に、㉘晩白稲は白稲の早晩二種として『琴川志』巻九に、それぞれ名がみえる。新出は㉙三穂千、⑬小娘糯、⑱烏香糯、⑲馬鬃糯である。次に『理生玉鏡稲品』にみえる蘇州府以外の土地についての文言を拾うと、

(1)京口［鎮江・丹徒県］大稲謂之粳、小稲謂之秈。

(2)毗陵［常州・武進県］小稲之種、亦有六十日秈・八十日秈・百日秈之品、而皆自占城来、寔耐水旱而成実、作飯則差硬。宋氏使占城珍宝易之、以給於民者。在太平［南直隷安徽太平府］、六十日秈、謂之拖犁帰。有赤紅秈、有百日秈、俱白稃而無芒、或七月、或八月而熟。其味白淡而紅甘。在閩［福建］、無芒而粒細、有六十日可穫者、有百日可穫者、皆曰占城稲。

(3)其粒尖、色紅而性硬、四月而種、七月而熟、曰金城稲。是唯高仰之所種。松江謂之赤米、乃穀之下品。四明［寧波］次於占城。其殆即所謂百日赤歟。

(4)其粒長而色斑、五月而種、九月而熟、松江謂之勝紅蓮。性硬而皮莖俱白、謂之䄷稉稲。

(5)其粒白、無芒而稃矮、五月而種、九月而熟、謂之師姑秔。湖州録云、言其無芒也。四明謂之矮白。

(6)其粒赤而稃芒白、五月初而種、八月而熟、謂之早白稲。松江謂之小白、四明謂之細白。九月而熟、謂之晩白、又謂蘆花白。松江謂之大白。

(7)其再蒔而晩熟者、謂之烏口稲。在松江、色黒而耐水与寒、又謂之冷水結。是為稲之下品。

(8)其粒白而大、四月而種、八月而熟、謂之中秋稲。在松江、八月望而熟者、謂之早中秋、又謂之閃西風。

(9)其在松江、粒小而性柔、有紅芒、白芒之等、七月而熟、曰香秔。其粒小、色斑、以三五十粒入它米数升炊之、芬芳馨美者、謂之香子、又謂之香穲。

(10)其在湖州、一穂而三百余粒者、謂之三穂千。

(11)其芒長而穀多白稃、四月而種、九月而熱。謂之臙脂糯。太平謂之殊砂糯。

(12)其色斑、五月而種、十月而熟、謂之虎皮糯。太平録云、厚稃紅黒斑而芒。

(13)其粒最長、白稃而有芒、四月而種、七月而熟、謂之趕陳糯。太平謂之雀不覚、亦謂之秈糯。

(14)其粒大而色白、芒長而熟最晩、其色易変。其釀酒最佳、謂之蘆黄糯。湖州謂之泥裏変、言其不待日之曬也。

(15)其粒円白而稃黄、大暑可刈。其色変不宜於釀酒、謂之秋風糯。可以代梗而輸租。又謂之瞞官糯。松江謂之冷粒糯。

(16)其在湖州、色烏而香者、謂之烏香糯。其稈挺而不仆者、謂之鉄梗糯。芒如馬鬃而色赤者、謂之馬鬃糯。

右の内、秔米についての(1)－(8)、糯米についての(11)－(15)は、蘇州府の名称が松江・湖州・寧波・太平府等で何と謂われるかが多く、秔米の(9)は松江府の香秔、(10)が湖州府の三穂千、(16)が湖州の烏香糯・鉄梗糯・馬鬃糯をそれぞれ取上げたものである。また、(1)(2)は常州鎮江地方で小稲＝秈、占城稲が作られていたことを示し、その品種としては六十日秈、八十日秈、百日秈があったといい、これは安徽太平府においても、六十日秈は拖犁帰と呼ばれたほか、赤紅秈、百日秈などの品種があったことを示している。太平府は地域区分では、次の(B)デルタ周辺に入れたが、同地域は秈＝占城稲が宋－明間に多く植えられていた。(I)長江下流デルタでは常州鎮江の一地方に秈が植えられていたことは注意を用しよう。

次に明代蘇州府下各州県志をみると、

A 4、崇禎『呉県志』巻二十九物産には、

秔①③④⑭⑰⑪⑲⑳⑧㉔⑬㉕㉖㉚大頭花㉛瓜熟稲㉘㉜黄梗秈㉞一粒珠㉟麻皮秔（作飯粒長）㊱薄十分（作粥易膩）㊲梗殺

鼈蜞②（香子米）㊳八月白㊴牛毛白㊵丈水紅㊶老来紅㊷五石稲㊸救公饑㊹包十石㊺累泥烏㊻土塘青㊼天落青（32種）

糯②⑪⑫③⑬⑩⑧⑭⑦⑮⑥⑯（胭脂糯）⑳野人糯㉑榧子糯㉒恍雄糯㉓烏鬚糯㉔観音糯㉕梗秈糯㉖佛手糯⑰㉗蟹殻糯㉘喜蛛糯㉙鴨嘴糯㉚香粳糯㉛珠子糯（25種）

この内、杭㊳八月白は南宋談鑰の嘉泰『呉興志』巻二〇風俗・物産にその名がみえ、また糯㉖佛手糯も南宋の崑山県志の淳祐『玉峰志』巻下土産、稲に名が挙げられている。しかし、その他杭の十六種、糯の十一種は新出種である。ただし、先行の地志等に名が掲げられていることは考えられる。次に同じ蘇州府の

A5、弘治『呉江志』巻六土産、穀には、

杭⑪㉘㊽大秈⑩㊾赤芒稲㊿白芒稲㉒51靠山青52靠籬望㊸救公飢㉖下馬看㉜黄梗秈⑫53大烏芒54小烏稲55晩陳芒56泥裏変57青光頭58花光頭⑰59光頭白60鵞脚黄61馬鬃烏62雪裡変⑭⑱⑦⑨⑤①②③④⑲⑯⑳㉑（37種）

糯②①③④⑤⑥⑦⑧⑨（銕梗糯）㉜早紅糯㉝早黄糯⑩⑯（硃砂糯）㉖佛手糯⑮虎皮糯㉞虎班糯㉟中秋糯（17種）

右で杭の㊸㉖㉜糯⑯㉖⑮はすでに前掲A2－4の地志にその名が示されているものであるが、弘治『呉江志』の方が成立が先だから、こちらを新出とすべきものであり、これを含めて杭十八種、糯六種がこの方志にはじめて名が見えるものとなる。同県の明代の次の県志、A6、嘉靖『呉江県志』巻九食貨志、物産、穀をみると、

杭①②㊽⑩⑪㉘㊾㊿⑧63烏稲5354⑯㉑64灰稲65雷稲66大黄稲67小黄稲5758⑲68雲南稲⑳（一名牛口烏）⑬56⑫61⑥⑩51⑱59⑨69麻子烏70赤秈71黄穲5572晩頰芒73小白稲74山白稲⑭⑦75紅皮稲③76紅蓬稲77紅蒙子㉕78赤穀稲79矯赤稲80紅稜晩稲81紫染頭㉜④⑰82鴨嘴稲83吊殺雞84無名稲85楊名香⑫（郡志入糯種）86野稲87慳五石88六稀稲㉒89三朝斉㊳八月白㉔⑤㉓52㊸㉖⑨（70種）

糯②㉛珠子糯㊱硃砂糯⑯㉖㊲竈王糯⑤⑧⑮㉞⑭⑫⑥㉓烏鬚糯㊳牛口烏③㊴赤穀糯㊵栗殻糯㉗蟹殻糯㊶芝麻糯㉑榧子糯④㊷瓜熟糯㉜㉝㊸長鬃糯⑱⑦⑨①⑩㉟⑬⑪㊹香糯㊺冷糯㊻晩糯（37種）

これは稲の品種を同時に数えた数としては最多で杭七十種、糯三十七種に上る。ただし、杭では㊾三朝斉と㉖下馬看を二つに数え、糯でも㊱硃砂糯と⑯臙脂糯を別にし、また糯㊺冷糯が冷粒糯とすると①の瞞官糯と同一となる。それでも、嘉靖『呉江県志』で杭二十八種、糯十五種が新出となる。

次に蘇州府東北部の所属州県では、南宋の『琴川志』に稲の品種が詳細であった常熟県では、

A7、弘治『常熟県志』巻一叙地理、土産、稲之品に、

粳⑤（救公飢）㉒⑨⑩（俗、黄粳籼）、㊽⑪㉘⑮⑨⑩光頭黄粳⑱⑲③②（香穲）⑨①鼠郎黄⑳⑫鵪鶉斑⑬顧公揀⑭雪裏尋⑮舜哥稲⑯節澳稲㉖下馬看⑨軟頸黄粳

糯①②③④⑤⑥⑩㊾抄社糯㊲竈王糯⑨㊽円頭糯㊾細葉糯⑮

右の内で粳⑨鼠郎黄⑫鵪鶉斑⑬顧公揀⑭雪裏尋⑮舜哥稲⑯節澳稲（或は時裏白、或は珠兒白）、及び糯㊼抄社糯は、『琴川志』巻九敍産にみえる。参考までに、『琴川志』の稲は、

杭④⑫③①②⑨◇野稲⑫⑭⑭⑰⑦⑬⑪㉘⑮◇稲裏稲◇雪裏扮◇揀出稲◇九節稲◇㉞⑨

糯⑩⑧㊼⑤⑬③②⑨

先（籼）⑯◇六十日⑲◇先禾

外⑳◇赤穀稲

となり、『琴川志』の品種が弘治『常熟県志』に継承されているものは、杭十三種（不一致九種）、糯六種（不一致七種）であり、杭十二種、先二種、その他一種の計十五種、糯二種が継承されていない。◇印は宋元代の固有種である。

A8、嘉靖『常熟県志』巻四物産に、

杭㉜③⑪㉘①⑬②④⑤⑫㉒⑨⑲⑱占城稲⑳㉑⑦⑯⑨江陰黄粳

糯②③⑥⑩⑫①⑨㊽㊾⑮

つけ加えは⑨江陰黄粳のみである。ただし、弘治志の粳十種、糯九種が継承されているが、粳の十一種、糯の四種が継承されていない。逆に嘉靖志には杭八種、糯一種が加わっている。粳は糯に比して継承されるものが少ないと言えよう。

A9、康熙二十六年（一六八七）修『常熟県志』巻九物産、穀には、

杭③①⑪④⑬⑭⑰⑤（救公飢）②⑫⑨㉒⑱⑲⑳⑦

糯②㊿稟子糯③⑥⑩⑭⑦⑮⑯⑧①⑨㊾

前志嘉靖志とはかなり変化しているが、新出は糯の⑤稟子糯だけである。次に崑山県は、

A10、嘉靖『崑山県志』一巻土産に、

粳③②（香粳）⑧（早粳）㉚青芒稲㉛紅芒稲⑪㉓小白稲㉘㉔㉝紅緑稲㉞金裏銀㉖㊸㊱薄十分㉕靠山黄⑭⑫㊾麻子烏㉜

糯㉛早糯㉜珠糯㉑㉓水晶糯⑰⑮㉔牛腿糯⑫⑥⑩㉕香子糯㊲㊻楊梅香⑧

とあるが、これも崑山県の南宋期の地志、淳祐『玉峰志』巻下土産の稲をあげると、

杭③㉓②◇烏野稲⑭◇白野稲◇稲翁揀⑫⑨◇軟得青◇時裡白⑤◇百日稲◇半夏稲⑲◇舜耕稲◇烏粒稲◇睦州紅④◇稿稑稲

◇山烏稲◇辮白稲⑦◇紅蒙子㉖

糯⑩㊼◇烏絲糯◇閩女糯◇金州糯◇定陳糯◇宜州糯㉖⑤

となるが、杭五種のみしか喜靖志は玉峰志から継承していない。杭・糯とも品種は一変したというべきであろう。崑山県では杭の香子稲（香稲・香粳）、紅蓮稲、雪裏揀稲、閃西風稲、下馬看の品種が根強い伝統となった。

次に、同県のA11、万暦『崑山県志』巻二土産に、

杭㉘㉝⑧⑲⑤㉔⑭⑬㊸㉖③⑨②（香粳稲）㊱㉜㊾㉚㉒㉑

糯⑩⑯⑨⑮⑥㊼再熟稲㉑㉓⑰㊺⑪㊲⑧①⑫②④

杭は嘉靖志の⑪早白稲⑫閃西風稲㉓小白稲㉚青芒稲㉛紅芒稲㉜中秋白㉔金裏銀㉕靠山黄が万暦志の⑤六十日稲⑨麦争場⑬紫芒稲⑲金城稲⑳烏口稲㉑烏児稲㉒百日赤㉔中秋稲に代わり、糯は嘉靖志の㉛早糯㉜珠糯㉔牛腿糯㉖楊梅香が無くなり、①謾官糯②金釵糯④蘆黄糯⑨鉄粳糯⑪閃西風⑯臙脂糯㊼再熟稲が万暦志に加わった。万暦志のは、宋以後の有名銘柄であるが、或は嘉靖志のはそれの異称である可能性もある。

A12、嘉靖『太倉州志』巻五物産、穀属は、杭稲、糯稲に分ける。杭稲は、洪武蘇州府志巻四十一土産の如く、「呉門事類」を引いて、呉俗における早・中・晩稲の種刈の時期を示した後で、

杭〔早稲〕⑪⑮㉖早紅蓮

〔晩稲〕㉘㉗晩烏稲㉘晩紅蓮

糯〔早〕⑩　〔晩〕㊽靠山糯

〔早晩不明〕㊺（香子稲）㊾杭糯

と分けている。稲の早晩作付が発達している地方であることを示している。品種の数自体は多くはない。

A13、崇禎『太倉州志』巻五、風土志、物産は、

〔早稲〕⑪⑮⑯㊳

〔晩稲〕㉘⑦⑧⑨嘉興黄㊲梗殺彭蚤⑩天落黄⑪香黄蓮⑫鴨嘴黄⑬蘆花白⑭銀杏白⑮木瀆香㊺

糯〔早〕⑩④⑥

〔晩〕㊽㊿老来紅⑮㉒恍雄鶏㊶猪騌糯㉔㊷粳鮮糯⑰㊺㊾梗(秔)糯㊸蘆花糯①

③紅蓮稲が早晩に分かれて早紅蓮、晩紅蓮と分かれるなど、明末太倉州では稲の品種は若干数が増したほか、微小な発達改良があったものと思われる。なお、秔稲について、木瀆香、靠山青を挙げた後に、

諸種名不一。大約七月望間、新米入市。諺云、河直西、喫新粞、言天河西指、則食新。十月中俱納稼。

とあり、また、糯稲には、

梗糯二色、粒小而長、以少許入他米数升炊之、極香美。又有円白而稃黄、大暑可刈、釀則少酒、作飯復傷湿、曰蘆花糯。

惟耐旱多収、可代秔輸租、又曰瞞官糯、佃多喜種。凡糯穀須曝、日中色変有光、名上変、方適用。曝不変、俗呼痴粳、更不如蘆花糯。

糯稲は醸造して酒にしたが、秔に代えて租として輸したものを瞞官糯という種もあったという。また、同州嘉定県では、

A14、万暦『嘉定県志』巻六田賦考、物産、穀属に

秔①（穿珠稲）⑪㉘㊿⑥（粒小而鋭、海郷多植之）⑯黄皮稲②（香秔稲）③⑤⑫㉖（穂長可看故名）⑰烏野香㊸⑭⑱稚蒙（粒麤）⑲軟稈青⑳大頭紅㉕㊼㊸㉑舜耕稲㉒睦州紅㉓隔岸擅㊳㉔砟倒変

糯⑩㉟⑮㊹橘皮糯㊺火珠糯㊻烏絲糯㊼軟稈糯㊶猪拖糯⑰⑫㊽矮脚糯①㊲②㊾豁裏糯㊿待西風

右の内で秔の⑲軟稈青㉑舜耕稲㉒睦州紅、及び糯の㊻烏絲糯は南宋崑山県の淳祐『玉峰志』巻下土産、稲にその名が見えるものである。それらを除くと、秔六種、糯七種が新出品種である。次に同じ太倉州属県ではあるが長江下口に位置する崇明島。

A15、万暦『崇明県志』巻三物産、五穀類に、

秔⑲③⑪⑤㉖㉕尖笊紅㉖深水紅⑳大頭紅㉒㉗拖犂帰㊱㉘湖州白㉙籠下歓②（香秔）㉜㉚陞田青

糯⑫㉑水仙糯⑩⑮㉒飛来落⑥㊹橘皮糯㉓香鬚糯㊶〔猪駿糯〕㊸㊹胡桃糯㉕揀選糯⑰㉖頭頸糯㉗牛筋糯㊲㉘蟢子糯㉙斫倒変㉖深水紅㉗拖犂帰は江北安徽や江西地方などにも多い品種で多分秈と思われ、金城稲（性硬）、早白稲（米赤）、六十日稲、尖笊赤とも併せて、崇明県は秈、占城稲が多かったものと思われる。なお糯米種も数多い。

松江、上海地方では、

B1、弘治『上海志』巻三田賦志、土産、穀類に、

秔①②③⑳⑮④⑬⑲⑩小秈㊽大秈⑪㉘⑫㉒

糯①②④⑥⑧⑩

とあり、洪武の『蘇州府志』土産の種以上の新しいものはみられない。なお、秔の⑩小秈以下、㊽大秈、⑪早白、㉘晩白、⑫閃西風、㉒百日赤は、その配列順に区別が考慮されているとすれば、それらが秈稲であることを示すかも知れない。

B2、正徳『華亭県志』巻三土産、五穀には、

秔⑤⑩②㉒㊽⑪⑫㉔㉘①③④⑮⑬㉖深水紅⑲⑳

糯⑬②⑩⑰〔小嬢糯〕⑧④（俗名泥裏変）⑥⑫⑭

秔の深水紅は、一丈紅等とともに丈の長い浮稲の類かという。明代の新種である。

B3、正徳『松江府志』巻六物産

秔㉜深水紅①②③⑪㉘⑬㉔⑲

糯　①②

と、あまり多くの品種を掲げていない。

嘉靖『上海県志』巻一物産。五穀之属には、

稲種甚繁、要其成熟之候、有三、蚤稲、中秋稲、晩稲。白稲最晩、秈稲最蚤。秈者秋不分栽、遂為稲。其米赤、宜於海郷。

とあって、秈稲種がこの地方で栽培され易いのは、海郷に宜しいからだという。品稲名の列挙はない。

B4、万暦『上海県志』巻三賦役志上、物産、穀には、

杭⑤（今名帯利回）㉒（今名擎犂望）㉛早白野㉜白花珠㉔㉘㉚光頭晩（光頭黄粳と同じか）㉙三稗千（三穂千と同じか）②㉝等西風⑥

糯㉚糸社糯㉛早紅蓮⑮⑥㉜攀𩞁糯㉓㉑〔猪驟糯〕①⑰

とあり、ほぼ杭糯の半数近く新種名がみられる。ただ名称が少しだけ違うというのが多い。

B5、万暦『青浦県志』巻一土産、穀には、

杭①㉒⑩㊽⑪㉔㉘②⑮③、（穄、粟）、⑬㉖深水紅⑲

糯⑬②⑩⑰⑧㉓⑥⑫

これも、先の正徳『華亭県志』等に近い。なお、穄、粟が混じっているが、これは稲ではなく、何かの手違いで混入したものだろう。

B6、崇禎『松江府志』巻六物産、五穀、稲に、

杭①②③⑪〔小白稲〕㉘〔大白稲〕⑬㉜〔白花珠〕⑨㉞一丈紅〔其再時面晩熟者、謂之烏口稲⑳〕㉔〔蚤中秋〕㉓〔再撩稲〕⑲〔松江赤〕

糯②①〔冷粒糯〕

先に、㉜深水紅とあったものと、右の㉞一丈紅は、天野元之助氏は同じもので[10]、水中に没して丈が長くなる、いわゆる浮水稲かと思われる、としている。

C1、常州府無錫県では万暦『無錫県志』巻八、食貨志二、土産、穀之属に、

粳稲　糯稲㉟江西種色紅早實㉘雲南稲粒大㉘占城稲〈注略〉③紅蓮稲〈注略〉②香粳〈注略〉

とあるのみであり、普通の杭稲としては紅蓮稲、香粳、江西種、雲南稲しか挙げられていない。江西稲はいかなるものか不明だが或は籼稲かも知れぬ。占城稲を掲げているのは、黄省曾『理生玉鏡稲品』に上述のごとく、「毗陵、小稲之種、亦有六十日籼、八十日籼、百日籼之品而皆自占城来……皆口占城稲。」とあるのに照応し、常州府では籼・占城稲が種えられていたのである。それに対し、同じ常州府でも、蘇州府常熟県に続く地で米どころと呼ばれた江陰県では、

C2、嘉靖『江陰県志』巻四下、食貨記、土産、穀之属に、

粳㊱黄粳稲③⑪〔白稲－早・晩〕⑯〔烏須稲〕⑬②⑲㊲辮䅟稲

糯⑨㉝光頭糯稲⑮⑩

とあるが、黄粳稲は黄粳秈、辮䅟稲は、辮白稲とすれば、南宋以来の品種である。また、糯の光頭糯は、南宋の咸淳『臨安志』や嘉泰『会稽志』などにみられ、杭州、紹興など浙江地方の品種である。

C3、常州府靖江県では、隆慶『靖江県志』巻三物産、樹藝、稲に、

(杭)㊳蚤黄川㊴晩黄川㊵晩青川㊶紅秈㊷白秈㊸㊼㊸税六升㊻蚤紅蓮②香杭

(糯)㉞蚤白糯㉟晩白糯⑮⑯⑨㊻姜黄糯⑬⑩㊹

(早)撤殺天

とあり、C4、万暦『靖江県志』巻六食貨、物産、穀品には、前掲品種に解説を附し、かつ若干の追加を行っている。すなわち、

(杭)蚤黄川〈米白蚤熟〉㊴晩黄川〈粒大、性和軟〉㊵晩青川〈亦白杭米〉

(秈)㊶㊷紅白秈〈八月熟、米長性硬、白者差軟〉㊻蚤紅蓮〈粒大而佳〉㊸救公饑㊼拖犁帰

(粳)㊸秕六升〈粒円、碩見収〉①箭子稲〈粒瘦長雪色〉⑫閃西風〈一名蚤中秋〉⑤六十日〈有紅白二色〉⑳烏口稲〈皮芒俱黒、初秋亦可蒔〉②香杭〈皮芒稍黒、和他米炊俱香〉

(糯)㉞蚤白糯〈先熟易落〉㉟晩白糯〈皮薄易釀〉⑮虎皮糯〈芒赤米白〉⑫羊脂糯〈晩熟、性軟色芳〉⑨鉄粳糯〈稈硬無芒易落〉㊻姜黄糯〈皮厚難晒〉⑬秋風糯〈次蚤米白〉⑩趕陳糯〈蚤種宜釀〉③青枝糯〈雖熟不枯〉㊼麻筋糯〈稈柔可為索〉㊹香糯〈香勝於香杭、粒長皮黒〉

撤殺天〈旱種〉

隆慶志に比すと㊼麻筋糯が増え、これは宋元時代になかった種である。それにしても、常州靖江県では宋元以来の品種がよく記載されている。新出のものは麻筋糯以外は宋元以来の種である。

次に黄省曾『理生玉鏡稲品』で「京口、大稲謂之粳、小稲謂之秈」とあった鎮江府では、

C5、万暦『鎮江府志』巻三十、物産志、穀属、稲に、

有秔有稷、秈之秔三種又有大小、土人謂大稲秔、小稲秈。

とあるので、稷・秈・糯に分ける。

秔②⑭鄭魚⑮灰鶴⑯時裡㊳⑬蘆花白⑰浪稈白⑱白蓮子⑲紅蓮子⑳早紅芒㉑晩紅芒㉒青川黄㉓稈川黄㉔馬尾烏㉕老了烏㉖〔今又有〕㉖塊紅芒㉕㊿白芒㉗黄芒㉘別煞天（亦名吊殺雞）〔数種〕

秈㉙白尖㉚紅尖㉛晩秈㉜六十日秈㉝八十日秈㉞一百日秈〔今又有〕㉟観音秈㊱銀条秈

糯㊽（二種）芒㊹㊻㊼⑫㊾牛蝨㉞㊿柏枝㉑長稈〔今又有〕㉒黄皮㉓矮箕㊹早白㉔中広⑲馬騂㉕雀嘴㉖称鈎㉗紅芒㊽麻肋早㉙秋風堆子㉚紅殻㉛鼈六升〔十二種。大抵与前或名異而種同也。〕

元の至順三年（一三三二）『鎮江志』巻四土貢、穀の稲は、大稲を秔、小稲を秈、さらに糯があって、稲種を三分し、次の品種を挙げる。

大稲（秔）②⑭⑮⑯時裏白㊳⑬⑰⑱⑲⑳㉑㉒青州黄㉓稈川㉔㉕㉖

小稲（秈）㉙㉚㉛㉜六十日㉝八十日㉞百日糯㊽㊹㊻㊼⑫㊾㉞㉚㉑

とあり、前掲万暦府志に示してある品種名の〔今又有〕以上のものがそのままピタリ一致するものである。従って、万暦志段階の新しい品種は〔今又有〕以下となろう。

応天府・南京各州県は、弘治『句容県志』巻三土産、穀之品に、

早稲　晩稲、糯稲

とあり、嘉靖『高淳県志』巻一物産、穀属に、

稲（有早晩烏白数種）　秈（早晩二種）　糯（早晩二種）

とあるように、品種名を挙げず、種類のみを示している。高淳県志で秔米を稲といい、秈と区別しているのが注目される。応天府でも若干の稲の品種名を掲げているものもある。

D1、嘉靖『六合県志』巻二人事志、土産、穀部には、

秈稲　糯稲　黒稲㉞麻秈稲　白稲　㊼麻觔糯

この麻觔糯は、万暦靖江県志によれば「稈柔可為索」という。麻秈稲・白稲・黒稲も品種名と思われる。次に溧陽県では、

D2、弘治『溧陽県志』巻二土産、穀類に、

秈稲㊽川稲㊾淮稲㊿黄蓮稲　烏稲　白稲②香稲㉑晩青稲㉛瓜熟稲

⑯臙脂糯㉒黄皮糯⑬秋風糯㉒種稜糯㊱朱沙糯⑥羊鬚糯⑦川杭(粳)糯

十五・六世紀の交になった、弘治溧陽県志には、まだ秈種は多くない。糯稲は宋元以来のものが殆どである。

長江デルタの浙江側では、まず嘉興府について、

E1、万暦『嘉興府志』巻一土産、禾品に、

杭㉒早花㉔中秋㉓晩花㉜黄秈㊿白芒㊾赤芒②香稲㊸烏稲

糯㊸白殻㊹烏簑㊺雞脚⑥羊鬚㊻蟹瓜

とあるが、あまり数が多くない。また、江蘇蘇州の代表的銘柄である箭子稲、紅蓮稲また金釵糯・蘆黄糯等の名がみえないのも注目される。同府所属県を検討しよう。

E2、正徳『嘉善県志』巻三物産、穀之類に、

⑪⑫〔早中秋〕㉔㉔六月紅㉔銀杏白①②㊸㉕鉄稈青㉖靠塘青㉘㉔山白塘

⑩⑰小娘糯㉚香稲㊼黄芒⑧⑥⑫㊽蒲子糯㉑榧子糯㊾野稲⑩赤稲㊲竈王糯⑪茄子糯㊷黄秈㊸黄糯

E3、万暦『秀水県志』巻一食貨志、物産、穀之品には、

杭①②㊽⑩⑪㉘㊾㊿⑧㊸㊸⑯㉑烏兎(兒)㊹㊻㊼㊸㊶㊿㊾㊾㊿㊾㊾〔晩陳〕㊸⑭㉗了田寿㉘雀不知㊽〔紅稑〕㉜⑫㉒㊾㊽㉔⑤

㉓㊷㊸（40種）

糯②㉛㊱⑯㉖㊲㊹西洋糯㊼麻觔糯⑫⑥㉓㊶㉑⑩⑨⑪㊹㊻（18種）

これは上掲A6嘉靖『呉江県志』巻九物産、穀の杭七十種、糯三十七種と、名称も配列順もかなり同一で、杭二種、糯二種のみが新出品種である。次に、府附郭の嘉興県では、

E4、崇禎『嘉興県志』巻十食貨志、物産に、

杭之品（早者）②〔香杭〕③〔香稲、又名紅蓮稲〕⑪⑫㊽

（遅者）㊸⑰黄芒㉜⑮鉄稈青㉘

糯之品（早者）⑩㊸㊹　（遅者）㉓⑫⑩蒲子糯⑮蟹衣糯㉑

この県はあまり品種の数が多くないが、杭糯とも早晩に分けるなどからみて、現実的であるとも思える。それにしても、嘉興府は蘇州、松江府と境を接しているだけに、稲の品種も共通するものが多い。右県志の物産の稲条の附文に、

禾土塗泥、徧地皆稲、而黍無生焉。按本府与杭州湖州蘇州松江、田之樹藝畧同、別府稍異。

とある。なお、天啓『海塩県図録』巻四方域篇第一之四、八之県風土記の〈鹽邑所産〉には、

禾之品、曰早杭・中秋杭・晩杭・早糯・晩糯。

とあるのみである。

湖州府、黄省曽『理生玉鏡稲品』に「其在湖州、一穂而三百余粒者、謂之三穂千」と特筆される湖州の品種中では、この三穂千が明代の新種として特色づけられる。

F1、成化『湖州府誌』巻八土産、穀類には、

杭㊳⑲趕冬春稲〔又名救軍粮〕⑱鴈来枯稲⑱綻来烏稲㉙三穂千⑫泰州紅㉖⑬野雞斑㊾麻子烏㊿鵞脚黄⑭老赤鬚⑰㉜黄梗鮮稲

糯⑯胭脂糯⑥⑲馬鬃糯⑯懶晒糯⑱烏香糯⑨⑩⑰泥裏変糯

F2、万暦『湖州府誌前編』巻二物産、穀には、

杭㉗⑲趕冬春⑱雁来枯稲㉜黄梗稲③⑯⑬㉙三穂千稲㉖㉔山白稲⑬野鶏斑稲㊿鵞脚黄稲⑲

糯⑩⑱先頭糯稲⑨⑥⑲⑱⑰泥裏変糯

とあり、新種名は糯の先頭糯稲のみである。なお、成化志にあった杭の綻来烏・泰州紅・麻子烏・老赤鬚、糯の胭脂・懶晒はその名がみえない。新種は糯⑱先頭糯稲である。ただしこれは㉓光頭糯と同じかも知れない。

F3、崇禎『烏程県志』巻四物産、稲類に、

杭（①）③④⑬㉙⑬野鶏斑㉔⑮冷水紅㉖⑲旱稲⑱黄龍稲⑰⑫泰州紅⑭老赤鬚⑲趕冬春

糯⑯懶晒糯㉓光頭糯⑨⑱㊱⑲⑲猪血糯⑥㉒黄皮糯⑧②⑩⑰泥裏変糯

秔の冷水紅、黄龍稲、糯の猪血糯が独自の指摘である。

F4、嘉靖『武康県志』巻四食貨志、物産、穀之属に、

秔(66)(67)㉔(73)(79)(74)(78)㉘(63)(80)(104)
糯㊴(120)湖西糯㊸㊵⑯⑨⑱

杭州府については、万暦『杭州府志』巻三十一、土産に、

　穀之属凡六、一曰稲、為秔、為糯〈割註〉名色甚衆、大都不出秔糯二種。但各有早晩不同耳。仁和・銭塘・海寧種多晩、余杭早晩半、余県多早。

とあり、その品種名は挙げないものの、所属各県には早稲、晩稲いずれを多く種えるかに違いがあり、仁和・銭塘・海寧の各州県は晩稲が多く、余杭県は早・晩半し、余の県臨安、富陽、於潜、昌化等は、早稲が多いという。

G1、嘉靖『海寧県志』巻一地理志、土産、穀之品には、

秔(187)早金成(188)晩金成(189)新羅散　白稲(182)泰州紅(104)金裏銀(180)雁来枯⑥(181)綻来烏(69)麻子烏㉜黄粳鮮②〔香粳〕
糯(51)⑥⑲㊻⑯(116)懶晒⑨(117)泥裏変

成化湖州府誌土産の稲の品種と非常に似ていることが注目される。距離的に近い嘉興府とはあまり共通した稲の品種はない。ただし海寧県の新出品種名としては早金成、晩金成、新羅散などがある。

次に紹興府では、

H1、万暦『會稽県志』巻三物産、穀之属に

杭蚕稲〈六月蚕熟〉　紫口〈甲嘴微紫粒細〉　朝稏〈俗謂之老了烏〉　麄稈　細稈　細珠　蚕白黏　晩白黏〈越人謂芒為黏〉　料水白〈歳遇甚潦、軟能長、出水上〉　余杭白〈粒円而白、俗伝種自余杭来、故名〉稚蒙〈粒麄而黏最短〉　烏啣来〈実類余杭白而色稍青〉(60)鵝脚黄　葉下蔵〈穂氐而葉卬〉健脚青〈熟時莖挺而色猶青〉宜興白〈種自宜興来。以上倶杭類、宜(秈)炊。〉
糯㉑③(71)水鮮糯〈八月早熟〉⑥⑯㉝〔蚕黄黏〕　黄殻糯　紅黏糯〈芒赤故名、糯之佳者〉

長江デルタと一致するものは杭一種、糯六種で、糯の方が多い。しかし、杭の中には余杭白、烏啣来、宜興白のようにデ

ルタの地名を冠したり、その関係のあることを説明したりする品種もある。余杭、すなわち杭州と結びつきの深い紹興府の稲の品種事情がある程度は窺えよう。

H2、万暦『上虞県志』巻九食貨志、物産に

杭　大白　散絲㉜黄秈　紅熟　宜秋　稍晩　青穡　最連

糯　八月㉑水鮮　紅黏　相続　黄糠　白芒　經霜　乃足

杭の散絲・紅熟・青穡、糯の水鮮・相続・經霜・乃足など独自な名称がみえる。稍晩・八月・経霜などは早晩を示す時期的品種名であろう。紹興府では他に、万暦『新昌県志』巻五物産志、穀之属などは「稲、其種不一」とあるのみで品種名を挙げていない。

続いて寧波府では、

H3、嘉靖『寧波府志』巻十二物土志、物産、稲に、

杭⑲金城〈五県同〉　早黄　烏撒　太倉紅　光穲⑱冷水紅〈已上鄞・慈・奉・定、同〉　細稈〈鄞・慈・奉、同〉　黄巖〈鄞・慈、同〉　矮白〈鄞・奉・定、同〉　木白　細撒㊽占城　大赤　赤撒〈已上鄞・奉、同〉　紅六十日〈鄞・象、同。象、呼為小暑〉㉘湖州白〈産慈谿〉　晩青　霜下白　湖州晩〈已上五県同〉　雁来烏〈鄞・慈・奉、定、同〉　旱稲〈宜山田、故名〉宜興晩〈已上鄞・慈・象、同〉　早珠　等西風〈已上鄞・慈、同〉㉙趕軍糧㊾麻子烏〈已上鄞・定、同〉　矮聯　崑山晩〈已上鄞・象、同〉　杭州白　野烏嘴　蛮稲　烏含稲　犁索辮　青浄晩　刀断斉　松江稲　勒馬看〈已上産鄞〉　早白　黄秸　白秸　縮頸早　戧八石㊹金裏銀〈已上慈、象、同〉㊸救工饑　大粒白　細白〈已上産奉化〉　早雪　早晩　沙秈　矮晩　木榔捶　茅葉斉〈已上産象山〉

糯　早糯　晩糯　黄香糯〈已上五県同〉⑨鉄稈糯〈鄞・慈同〉⑮虎皮糯　黄扁糯〈鄞・慈・象、同〉③青稈糯〈鄞・奉・定、同〉　白糯　麻糯　烏撒糯〈已上鄞・奉・象同〉　赤糯　九月糯　丁香糯　紅糯　雉雞糯〈已上鄞・奉、同〉㉑水鮮糯〈鄞・定、同〉　玉山糯⑯燕嘴糯　烏箭糯　瘦田糯　冷水糯⑥羊鬚糯　火焼糯〈已上産鄞〉　朱口糯　矮黄糯〈已上産慈谿〉　丁畋糯〈産奉化〉㉗泥裏変〈産定海〉　秸糯　桂花糯　烏節糯〈已上産象山〉

そのデルタとの関係は杭・糯の品種名が一致するもの（前者七種、後者六種）よりも、デルタの地名が冠してある品種名

に、杭の太倉紅、湖州白、湖州晩、宜興晩、崑山晩、杭州白、松江稲とあるのが注目される。逆に、崇禎烏程県志に初見の⑱冷水紅は、嘉靖寧波府志の方が記載が早く、寧波から湖州へ品種伝播が行われたものと思われる。

寧波府の所属県では、

H4、正徳『慈谿県志』巻三土産、穀属に、

杭稲　烏芒　光穲⑲金城　黄巖　細稈　晩青　早黄斉　太倉紅　雁来烏　霜下白⑱冷水紅⑫湖州白

糯稲　早糯　晩糯　鉄糯　矮黄糯　烏撒糯　朱口糯　黄褊糯⑮虎皮糯

先の府志の慈谿県産とあったものとして、杭に金城・早黄・烏撒・太倉紅・光穲・細稈・黄巖・湖州白・晩青・霜下白・湖州晩（これは右に無し）、雁来烏・宜興晩（無し）、早珠・等西風（無し）といった如く嘉靖府志の品種の方が数が多い。正徳―嘉靖の時間差がかかわるかは、何とも言えない。

H5、嘉靖『定海県志』巻八物土志、物産、稲之属には杭・糯に分けて、

杭⑲金城　早黄　烏撒　太倉紅　光穲⑱冷水紅　細稈　黄巖　矮白　六十日⑫湖州白　晩青　霜下白　湖州晩　雁来烏　旱稲　宜興晩　早珠　等西風　趕軍粮　麻子烏　崑山晩　杭州白　犁索辮　清浄晩　刀断斉　松江稲　早白　縮頸紅　硬脚紅　戯八石　烏嘴　黄穆

糯　早糯　晩糯　黄香糯　黄扁糯③青稈糯　鏟程糯　丁香糯⑦水鮮糯　冷水糯　火焼糯　矮黄糯⑰泥裏変　隔江牽

府志に産定海とあるものはすべてある。県志には府志以上の数の杭・糯の品種名が挙げられている。

以下、デルタ地方以外の(Ⅱ)―(Ⅶ)の各地方の稲の品種を調べるが、それがデルタの品種名と一致するもののみ番号を附す。

(Ⅱ)デルタ周辺〔江蘇江北・安徽〕

まずⅠ揚州府、淮安府、附徐州の南直隷、江蘇江北について調べてみた。

Ⅰ1、揚州府江都県について、雍正『江都県志』巻七疆域志、物産、穀に、

杭（秈）黄稜　烏節　大小香班秈　水赤秈　小白秈　龍瓜秈　六月秈　斉梅秈　蘆稈秈　葉裏秈　麻觔秈　大鵝秈

白殼⑤⑪㉘　晩黄　赤鬚　黒支　焦黄⑳　大紅芒　小紅芒㉖　六月白　鷺鷥白⑰了田青㊸球饑公（救工饑か）　綆子籠

下歓　潮水白⑫拖犁帰⑭深水紅　梅裏黄㊸弔殺鶏　張公赤　磊塊赤　山骨崙　鶴脚烏　馬尾赤

（秔）　紫紅芒⑱雀不知　観音白

糯⑩⑫　燕口⑥　秋紅㊹橘皮⑮㊶猪鬃　粉皮⑬　雀不覚

とある。同県は籼が圧倒的に多いが、大鵝籼の割注に、

掲州山田多宜籼、故籼称旱稲。始占城有此種。宋大中祥符五年、聞其耐旱、遣使求其種二万斛、分給江淮間。漕司令民択田高者、藝焉。因名占稲。

とあり、宋真宗大中祥符五年（一〇〇五年）に占城稲が江淮（及び両浙）の高田に移植されたことを伝え、これが江北・両淮地区に籼が多いことの淵源という。

I 2、万暦『通州志』巻四物土志、物産、稲には、

秔　黄稜　烏節　大香班籼　白殼㊿白芒　⑪㉘　晩黄　赤鬚　黒皮　焦黄⑳㉖　鷺鷥白㊼了田青㊸救饑公　綆子籠　下歓潮水白

糯　早糯　晩糯　白糯　黄糯⑥㊼麻觔⑮⑪猪鬃　粉皮

とあるが、これは先の江都県の品種とほとんど一致し、いずれも蘇州地方の品種名と独自性が認められるも、類似性も多少認められる。

嘉靖『海門県志集』巻四食貨　土産、穀類には「粳稲　糯稲　荞麦　蕎麦　黍　芝麻　黄豆」とあるのみで、品種名を挙げない。

I 3、隆慶『儀真県志』巻七食貨攷には、

凡穀産多糯、多晩、多籼、有黒稲、多麦、多豆。

とあり、穀を多く産する糯稲、晩稲、籼稲、麦、豆と産出が確認されるだけの黒稲に分ける。この晩稲は糯・籼との区別から粳と思われる。その割注に品種名を挙げる。

糯　燕口　紅芒㊼麻觔　社前黄

晩　江南白　駝児白㉖深水紅　長芒白

籼　瓜熟　龍瓜　鯽魚　班籼　葉裏蔵

黒稲　鶴脚烏　猪林

ここでも、蘇州地方の品種名は全くみられない。⑫⑥深水紅が注目されるぐらいである。

嘉靖『宝応県志略』巻二田賦志附、物産は、

五穀惟稲。更宜微赤而味独永。

とあるが、これも秈が植えられることを言ったものと思われる。

I 4、隆慶『高郵州志』巻三物産志、穀は、早稲、秈稲、白稲、晩稲、糯稲に分け、

(早)　五十日　六十日

(秈)　班秈　六月秈　斉梅秈　蘆稈秈　龍瓜秈　鯽魚秈　葉裏秈　苞裏斉⑫⑦拖犂帰　小赤秈　小白秈　麻觔秈　大鵞秈　大香秈　小香秈

(白)⑪早白稲　虎白稲　軟勁白　羊鬚白　它児白　青楷白　青芒兒　頂露白

(晩)　黄花稲　小黄稲⑫⑥深水紅　鶴脚烏　㉖⑧③吊殺鶏　母猪鱗　以上俱杭類

(糯)⑬⑧⑦麻觔糯⑥⑥烏絲糯⑩〔趕上陳〕　雀不覚⑥　以上俱秫類

杭稲がデルタ下流と殆ど異称であるのに対し、糯稲では一致するものがみられる。

嘉靖『如皐県志』巻三食貨志、土産は、

早稲、晩稲、糯稲

とあるのみである。

I 5、崇禎『泰州志』巻一職方志、物産、穀類には、

杭⑱②海陵紅（俗名泰州紅）　馬尾赤　鶴脚烏⑰⑧雀不知　随犂帰④③⑤⑥⑤駝兒白　小香　早香　黒早　白早　早秈　斑秈　焦芒　青芒　赤芒　黄芒　紫紅芒　烏殻⑫⑥深水紅⑰⑦了田青㉖⑭鯽魚秈　香粢　鱔魚黄

糯⑩⑫　燕口糯⑥⑮　秋紅糯　紅糯⑤⑤

ある程度の数が杭・糯ともデルタと共通する品種名を持っている。糯はそれがやや多い。杭の不一致のものは、あるいは秈・占であるかも知れない。なお、揚州府の万暦『興化県志』巻二地理、物産、穀には「稲有多種、糯有多種」とあるのみ

で、品種名を挙げていない。

万暦『淮安府志』巻四田賦志、物産は、

五穀、稲有秔糯二種。有早晩二熟。有紅黄紫赤斑数色。名品甚多、不能悉載。

とあるのみで品種名を挙げない。同府属県の塩城県でも、万暦『塩城県志』巻一地里志、物産は万暦府志と同様の記事である。

嘉靖『徐州志』巻五地理志下田賦、物産、穀之品、稲には、

州県、比年水盛、農多藝稲、産亦頗広。蕭県白米、山泉所灌。稲米潔白異常。

と、稲の栽培を伝えてもその種類品種は記事無し。

海州も隆慶『海州志』巻二土産、五穀、稲に「有秔糯二種。有早晩二熟。有紅黄紫赤斑数色。名品甚多、不能悉載。」とあるのみで、品種名を示さない。

次に安徽地方に移ると、まず江北の鳳陽府及び廬州府及び周辺の州（J）についてみる。

J1、万暦『帝里盱眙県志』巻四賦籍志、物産、穀類は、稷、黍、粱の北方系作物を挙げ、次に稲について秔・糯を記すが、秔はさらに秈稲と晩稲に分け、その品種名を挙げる。

秈　西田早又名江西早⑫拖犁帰又名六十日　金穀秈　斉尾秈⑯観音秈　蘆甘秈　拋犁秈　斑秈又名麻秈　早秈　白秈　鰕鬚秈　竜骨早　飛上倉　縄児秈　鵪鶉秈　三日斉

晩⑩早紅蓮⑫深水紅　羊鬚白　爛皮晩　駝兒白　爛芒白　小黄　脹殻秈　黄稜公一名黄花稲㉖下馬看　蘇州白

糯　斉秈糯㉒黄皮糯　南糯　八月白　社前黄⑲馬鬃糯　烏尖糯㊼麻觔糯　槐花糯　蘆甘糯　翅子糯⑥羊鬚糯⑮虎皮糯　猪矢糯⑯臙脂糯　女児紅㉔観音糯

下流デルタと共通する品種が特に糯にみえる。右の晩には秈名のつく品種のあることから、秈が入っているかも知れない。

J2、崇禎『鳳陽新書』巻五農政篇、五、積産穀の頭注に、

稲之名在鳳陽者、有深水紅、種之墟者、其別有黄六公、脹破殻、閃風斉、蘇州白、救公先、雀不知、下馬看、金裏銀、泰州紅、飛上倉、即魚麻、羊鬚、凡十四種

とある。盱眙県志同様に蘇州白が注目されるが、深水紅、下馬看、金裏銀、泰州紅、羊鬚など、蘇州、湖州等下流デルタと共通する名がみえる。

J3、万暦『帝郷紀略』巻三、輿地志、土産も、盱眙県志とほぼ同じ分類（秈・晩・糯）であるが、刊本の刷りが悪く判読できないものもある。読めるものだけを挙げると、

秈　西田早一名江西早　早口拖犁帰一名六十日　稲□早　早秈稲　六月白　滁州早　金殼秈　□□秈　観音秈　蘆□秈　拋犁斉　斑秈一名麻秈　早秈　白秈　鰕鬚秈　縄児秈　鶉鶴秈　香獐秈　飛上倉　竜骨早　百日斉　瀾皮秈

晩　早紅蓮　深水紅　羊鬚白　虎皮秈　小黄　□□一名□□　□角烏　□□白　□児白　牛口烏　□芒白　□穀秈㉖下馬看　黄□□一名黄老白　蘇州白

糯⑮虎皮糯　猪矢糯　紫□糯一名沙茫糯　□□□　□□□　臙脂糯一名女児紅　鷹口紅　烏□糯　麻觔糯　□仙糯

これも、盱眙県同様なことが言えるが、いずれにしても秈の方が品種数が多い。

嘉靖『天長志』巻四人事志、物産は、

穀類宜稲、秈稲凡十種、糯稲凡七種、白稲凡二種、晩稲凡三種

とあるのみで品種名は挙げていない。白稲と晩稲の区別など不明であるが、ここでも秈の多いことはいえよう。

J4、正徳『潁州志』巻三物産、五穀部は、

㈱鮮稲　黒稲　烏芒　獐牙鮮　西天早　山黄稲　火旱稲　紅芒稲　望水白　挨天黄

㈱虎皮糯　飛上倉　紅皮糯　鯽魚糯　龍骨早　青芒稲　七十日稲

これは、万暦『潁州志』巻五食貨、物産にも始めの鮮稲・黒稲を除いて掲げてある。なおこれによれば、挨天黄までは秈で、虎皮糯以下は糯となっている。デルタ地方とは糯の虎皮糯のみが一致する品種名である。

嘉靖『寿州志』巻四食貨、物産には、

穀類　麦大小蕎三種　稲寿霍有稲田、種稲頗多。婁則差少　粟

とあり、品種名も種類も示さない。嘉靖『宿州志』巻三食貨、物産、穀類も、

稲靈壁有稲田、種稲頗多。宿惟東北郷間有之。

と宿州での種稲は東北郷、つまり霊壁県に近い地区だという。なお、万暦『宿州志（甬志）』巻六、食貨志、壌産は、穀類に麦大小蕎三種、粟、稷、蜀秫、粱、稲、豆を挙げるが、「稲　間有之」と稲の栽培があまり盛んではないような記述をしている。

次に安徽江北南部では、まず滁州について万暦『滁陽志』巻五物産、穀之属には「秔稲、糯稲、白稲、晩稲」とあるのみ、泰昌『全椒県志』巻二田賦志、物産、穀之属も「稲為秔稲、為糯稲、為白稲、為晩稲」と述べ品種名を示さない。

万暦の『和州志』巻六食貨志、食属、穀菽でも、

秔稲　糯稲　晩稲　白稲　紅稲

とあるのみで白稲、紅稲など何を指すか不明であるが、秔をまず挙げている。

廬州府六安州では、万暦『六安州志』巻三食貨志、土産に、

穀属　多稲。稲有数十種

とあり、ここも品種名を示さない。

安慶府についても、嘉靖『安慶府志』巻十二食貨志、物産は「多稲」というのみである。ただし、安慶府望江県については品種がわかる。

J5、万暦『望江県志』巻四食貨類、物産、穀部には「有稲」とあり、その割注に、

秔　糯　金成早又名占城早。唐太宗伐占城国、得其種。即俗呼六十日是也。有七十日　矮黄　乱麻秔。

とあり、秔・占城稲の金成早（六十日）、七十日、矮黄、乱麻秔が挙げられている。すべて秔である。

安徽江東地方に移ると、

嘉靖『太平府志』巻五食貨志、土産、槩産の項には「禾　黍稲稷蕎麦麦荳。芝麻」とあるのみであるが、康熙『太平府志』巻十三物産は、秔・晩稲・秫種各種の品種名を挙げている。ただし、康熙志は康熙四十六年（一七〇七）の刊修のため、次回で取上げる。

寧国府では、嘉靖『寧国府志』に物産の記事はない。

広徳州では、万暦『広徳州志』巻三食貨志、物産、穀之品に、

早稲　晩稲　糯稲

とあるのみで品種名を挙げない。同州下で、嘉靖『建平県志』巻二田賦志、物産も穀之属としては稲、秫とあるのみである。

池州府では、

K1、正徳『池州府志』巻三食貨、穀類に、

杭　白六十日　紅六十日　白八十日　掃箒白　百日黄　六月烏　江西早　矮箕早　長箕早　蜞包早　茄柯早㉖下馬看㊸救公饑　湖広秈　白沙秈　蝦鬚秈　蓮子秈　竹了秈　毛黄秈　寒秈　鼠牙秈　金稈秈　鉄稈秈　令水秈㊹金裏銀　三有黄鷹脚紅　撩霜晩　稲下晩　釣竿晩　蘇州晩　観音晩

糯　烏嘴糯㊼抄秋(社)糯㉜早紅糯㊸白殻糯㊿紅殻糯　柳候糯　楊花糯③青稭(稗)糯　随秈糯　柿紅糯　麻子糯　魚子糯　雪花糯⑲馬鬃糯　望水白　斉頭黄　盖下箕　見缸消　七斗糟

と、杭糯についてその品種名を詳細に挙げる。なお、配列順から撩霜晩以下が晩稲（粳）で五種、鷹脚紅以前が秈で二十七種でないかと思う。秈の江西早、湖広秈は長江中流域との関係を示すものであろうし、粳・晩稲の蘇州晩は下流デルタとの関係を示すものであろう。それにしても、杭の下馬看、救公饑、糯も馬鬃糯・麻子糯ぐらいしか下流デルタとの共通品種名は見出せないのは注意してよい。なお嘉靖『池州府志』巻二風土篇、土産は「穀　多稲」とあるのみで品種名を挙げない。同府属の嘉靖『銅陵県志』巻一地理志、土産も、穀類に「稲　有多種」とあるのみである。また、万暦『青陽県志』巻三原財篇、物産、穀にも「有杭稲、糯稲、晩稲」とあるのみである。

K2、万暦『石埭県志』巻一輿地志、土産、穀品に、

早稲㊸救公饑（六十日可収）晩稲⑮虎皮糯　野鶏斑糯　撩霜晩

と、数種の早稲、晩稲（糯稲）の品種名を挙げている。早稲はわずか一種、しかもどこにもある六十日稲、糯は虎皮糯以下三種である。

次に徽州府では、

K3、弘治『徽州府志』巻二食貨、土産、穀粟は、秈穀、杭穀、糯穀に分け、その品種名と性質を述べる。

秈　大白帰生　小白帰生　紅帰生　桃花紅（桃花米）　冷水白　筆頭白　早十日　中帰生　晩帰生　占禾（又曰旱稲）
　寒秈〔祁門県〕
秔　大粟黄〔硬稈粟黄〕　小粟黄　蘆黄（一名富不覚）　珠子稲　烏鬚稲　婺州青（其来自婺州）　葉裏青　斧朏(㬎)白　赤芒稲（号為六十日）　九里香（五里香）　馬頭紅　万年陳　沙田白　寒青
糯　青稈　羊脂　白矮　牛蝨糯　早帰生　交秋糯（又名金釵糯）　秧田糯　大叚糯

これは徽州の南宋淳熙二年（一一七五）修『新安志』巻二敘物産、穀粟の項とその品種のみならず、その説明文も全く同一である。ただし、秈の祁門県にある寒秈と糯の大叚糯は追加となっている。新安徽州府では秔は大米、秈は小米と呼ばれたが、「新安之穀、大率宜秈而不甚宜秔」（新安志、弘治徽州府志）というごとく、同地方では秈の栽培が普及していたと考えられる。

K4、万暦『績溪県志』巻三食貨志、土産、穀之属は秈穀、秔穀、糯穀に三分して、その品種は、

秈⑭金裏銀　嚴州矮　六十日　早百日　遅百日　拖犁望⑯早紅蓮　柳条青　竹萼青　満田搾
秔　慈茹秈　馬頭紅　沙田白　冷水白　福徳禾（按秈秔雖異名、格以古皆稲也。）
糯　麻子糯　令水糯　烏節糯　紅鬚糯　早糯　金絲糯　響鈴糯　乾巳糯　交秋糯

長江デルタとその品種名をかなり異にする。特に糯においてもそうであるのは、他地域に比較しても珍しい。

(Ⅲ)江西

江西は鄱陽湖周辺や贛江、その他河川の下流域の水田地帯と、山岳丘陵部の水田畑作兼営地帯とに二分、もしくは三分されるが、一括してみていく。

L1、嘉靖『九江府志』巻四食貨志、物産、穀属に、蚤穀、白穀、紅穀、晩稲、烏穀、芒穀（一名種穀）、糯穀に分けて品種を挙ぐ。

蚤　駝犁回　留姑早　王瓜早　六十日　九十日
白　竹Y占⑬蘆花白　大白穀
紅　鴨掌秈　柳条赤

晩（米白而質膩、種後晩生。）
烏（殻黒而多芒、五月始種、晩生耐旱。）
芒（一名種穀、有烏白二種。）
糯　早糯　紅殻糯　黄金糯　哽鶏糯
その品種を挙げるのは蚤・白・紅・糯で、晩（稉）・烏はその性質の説明だけである。これから蚤・白・紅はいずれも秈の可能性が高い。駝犁回　王爪早　六十日、白の蘆花白などは下流デルタやその他と共通する品名である。
なお、九江府彭沢県については、万暦『彭沢県志』巻三食貨志、物産、穀に「早稲　晩稲　秔稲　糯稲」と分類を示すのみである。隆慶『瑞昌県志』巻一輿地志、物産も「穀　秔　糯　麦」とあるのみである。
正徳『南康府志』巻五、物産、穀類も「早稲、仙稲、糯稲」と種類のみを示すが、粳種はなかったかの如くである。同府建昌県の万暦『建昌県志』巻一輿地志、土産、庶穀に「稲」とあるのみである。
L2、南昌府下の嘉靖『靖安県志』巻一輿地類、物産、五穀類には、
早占　百日早　油紅　蘆花早　油赤（七月熟）、洞秸　棕子糯　麻糯（九月熟）、粳糯　冷水糯　寒秸　大禾糯（十月熟）。
と列挙しているが、どうやら早占から洞秸までは秸＝秈＝占であり、棕子糯以下は糯・晩稲であるようだ。
同じ南昌府の嘉靖『進賢県志』巻一物産、穀は「秔稲・糯稲・秸稲」と三分している。
L3、嘉靖『撫州府志』巻五地里志四、物産稲之属には、
占　大占　細占（名目不一。其先占城種。春社日前後、浸種。立夏前後、蒔秧。　至秋而熟。）㊸救公飢（一種最早。田家種以続食。）
晩（穀大於占。田宜隘。至冬廼熟。）
秫（稲之粘者。俗後謂之稉。）蚤稉　晩稉（名目不一。並堪釀酒、製醯。麺間用之。）
ここでも占（秈）のみ品種名が挙げられているが、数は多くはない。救公飢は各地にみえる品種である。
L4、嘉靖『東郷県志』巻上、土産、穀之属は、占、秔、稉に分け、説明する。
占　早占（穀薄米小而白、香而味美。立秋前熟。田宜高原、稼雖甚茂、穀亦不多。農家少種之。）㊸救公饑（一名五十日

占。比早占、更早熟十数日。此尤穀少。農家種以続食。）白沙占（立秋後乃熟。宜為粉線。宋時、崇仁人善製経進、名曰米欖。）倉背笑（穀大殻厚而少米）

秔（字林云、稲之不粘者為秔。即今、晩禾一名准禾。八九月熟。田宜隰。）竹種品　師姑早　冬占

稷　早稷（立秋後熟。米白而多　以釀酒。酒清而多。田宜隰。糞宜多。）　晩稷（与晩稲同熟。撫人造紅麺、用晩稷。）

㉓白殻稷　青絲稷　重陽稷　胡椒稷　焦紅稷（以色得名、又名猪血稷、皆晩稲也。）

江西の中心、撫州府であるが、デルタとの共通品種はわずか、独自なものばかりであるが、占・秈の栽培が多いようである。

L5、広信府の万暦『弋陽県志』巻六食貨志附、物産、穀之属に、

早稲　種先而熟早。有㊸救公先。㊾三朝斉　㉒六十日早　等名。

白穀　有白沙早、紅根早、汀州早等名。

紅穀　有夏桃紅、北風占等名。

晩穀　米白而性膩、種後收晩。

糯穀　有早糯、紅糯、白糯、重陽糯、胡椒糯、霊山糯等名。

早・白・紅は占＝秈かも知れない。福建地名の汀州早のあることが注目されよう。

L6、正徳『建昌府志』巻三物産、穀之属に

救公饑（三月種、五月熟。他種青黄不接而此種先可食。故云、可以救公饑也。）

六十日占（種入地、僅両月而熟、故名。米粒小而純白。）

白沙占（三月種、六月熟。米色白円而大。）

大穀占　細穀占（二種以粒大小異名耳。）

中早（遅於六十日占、而早於白沙早、故名。）

池州占○龍牙占○油麻占○磨陽占○冬占（穀粒似早占而芒刺長○上各種俱出占城国、故名。宋大中祥符中、遣使由福建至占城国、取三万斛、并種法。故江淮間多種之。）

八月白（晩稲。極早熟者、香白尤可貴。又名銀珠米。）
白粳米（即秔也）　青絲粳（四月種、九月熟。米色温潤而白。）赤珠粳（色純紅而堅。）　鉄脚粳（米性堅而難煑。新城尤多。）　重陽糯（応節候而熟、故名。）
占禾糯（与早稲同熟）　青油糯（穀粃白而米長）　老人糯（芒刺長而穀赤）
ここも占と糯の品種名が多く挙がっている。
L7、万暦『建昌府志』巻二物産、南城県は、
淮米（与五十詹同、稍遅十日）　五十日糯（熟早、謂子糯）　江東早（耐旱多粒）　龍牙詹（八九月方収、米色如硃）
とあり、ここに詹とあるは籼・占・秈のことかと思われるが、籼と糯について南城県物産の穀類は注目している。淮米という言方も、江西や湖広に多いことは注目しておくべきだろう。
L8、万暦『南豊県志』巻三食貨志、土産、穀之属は、
五十日占（即救公饑。三月種、五月熟。須附近饒田方可種。）　六十日占　淮禾早　大穀早　白沙早　龍牙早（熟遅、米粗、味淡而耐旱、易培）　黄土占　江東占（耐旱多植）　百日占　清流占　華山占　湿涼占　茅裡占
八月白　鉄脚粳
光頭藜　缺芒藜　細穀藜
三有糯　響鈴糯　重陽糯⑮虎皮糯　椒子糯　老人糯　長腰糯　塩夫糯㉓光頭糯
ここでも占と糯の品種名が多いことは、建昌府志と同様である。米所であると言えるのかもしれない。なお、五十日占を救公饑とあったが、これは江西各地に共通することかも知れない。六十日占より短い成育期間であることを示すのであろう。糯の虎皮糯・光頭糯がデルタに共通する名称であるほかは、殆ど独自なものである。なお塩夫糯という謂方は、淮禾早、淮米という謂方とも関係して両淮地方との関係を窺わせる。
L9、崇禎『瑞州府志』巻二十四、物産志、穀之属には
(秔)　団殺草、尖穀早㊸救工饑　随犁帰　七十日早　百日早　秋風粘　冷水粘　遅穀　湖田　赤光　大禾　芒大禾　代禾
(糯)　早糯　烏糯　白糯　黄糯　紅菱糯　松穀黄荆糯　鉄脚糯　重陽糯　遅糯　大糯　鴨脚糯　交秋糯

秔も救工（公）饑　随（回）犁帰など占・秈である可能性が高い。いずれにしても、瑞州で稲・米の品種を具体的に挙げていることは、それが市場流通につながる商業性穀物であることを示していよう。

L10、隆慶『臨江府志』巻六農政、土産、稲には、

稲、名目不一。大約春社日前後、漬種。立夏前後、蒔秧。至秋而熟。有一種最早熟者、名救公饑。色白味香甘。有団穀早、雲南早諸種、孚甲薄而米堅好。有秋風占、簑衣占諸種、色赤甲厚。有金穀占、田之低窪者種之。六月挿秧、九月方熟。

有晩稲、至冬乃熟、色白粒長。種之者少。而性則冷。

又有蚤糯、有晩糯、竝堪醸酒。

とあり、ここも稲を三分し、占、晩稲、糯稲としているようであるが、占のみに救公饑、団穀早、雲南早、秋風占、簑衣占金穀占などの品種名を挙げる。なお、晩稲はこれを種える者少なしとある。右の記事は、崇禎『清江県志』巻三土産、五穀にも全く同文で引用されている。

L12、正徳『袁州府志』巻二土産、穀は、占穀、晩穀、糯穀に分けている。

占穀（紅白二種。其種）　五十日占（俗名救工飢、熟最早。然不広種、少蒔以接糧。）六十日占　八十日占　百日占　大占　鬚占

晩穀（熟稍遅、為飯、香軟）　贛州早　団穀早　旱穀（陸地可種）

糯穀　早糯（以七月早熟。土人仰此以為新酒。）晩糯（以十月穫。粒大而堅。用此造経。其名不一。）白穀糯　矮脚糯　燕口糯　鴨婆糯　重陽糯　椒子糯

占穀、晩穀、糯穀ともある程度の数を挙げている。晩穀が占に含まれるか、粳なのかは不明である。

L13、吉安府では嘉靖『永豊県志』巻三物産に、

永豊民、惟稼穡五谷種備（有白穀、紅穀、晩穀、糯穀等類）而早稲惟先（種先而熟早、有救公饑、三朝斉、六十日占、九十日占。取其早穫、可種雑穀）。

とあり、稲の種類には白穀、紅穀、晩穀、糯穀があるが、早稲が先、大事であるとし、その品種としては救公饑、三朝斉、

六十日占、九十日占がある。その早稲を取って雑穀を種えるべしとは、土地利用の徹底、集約的農業の勧めといったものとして注目しておくべきだろう。そのための早稲の栽培なのである。

L14、嘉靖『贛州府志』巻四食貨、物産、穀には、

(秔)麺稲　光稲　早晩稲　秋分稲　南来粘　饒粘　大穀粘　鼠牙粘　火焼粘　三夾粘　葉底粘　六旬黄　蝢斉黄　矮黄　筋竹白　冷水白　八月白　落坑烏　大穀紅　閃霜紅　黄鉄錘

(糯)早晩糯　赤節糯　椒子糯　黄梔糯　羊毛糯　鰕鬚糯　重陽糯　竹絲糯⑤師姑糯㊴竈君(王)糯　早晩秔

と、秔糯にわたって多くの品種名が挙げられている。秔の中に占・秈がかなりの程度含まれていることは明らかである。

L15、嘉靖『瑞金県志』巻一地輿類、土産、穀類には、

早稲　晩稲　糯稲　大糯⑩④金包(裏)銀　水珠糯⑫羊鬚糯　湖広糯　陝西糯

と、秔糯を区別なしに挙げているが、秔の品種名が見えないのに対し、糯の品種六種が示されているのが注目される。先の府志の師姑糯と県志の羊鬚糯は下流デルタの糯米の代表的銘柄であることも注意してよい。

L16、万暦『瑞金県志』巻食貨志、物産、穀類に、

早稲　晩稲　早糯　大糯　金包銀　水珠糯　湖広糯　陝西糯　羊鬚糯　大麦　小麦　蕎麦（瑞金旧不知麦。隆慶三年知県呂若愚、命民人湯謨等、買麦種於鄰郡、給散郷民、教以樹藝之法。但土性不相宜、雖種少生。）

先の嘉靖志の糯稲が早糯に代わっただけだが、その間に麦作の二毛作が奨励されたという。

L17、万暦『寧都県志』巻三田賦志、物産、穀類には、

六旬黄　七旬黄　八月赤　八月白　留外□　救公饑　師姑早　和尚光　倉背笑　大穀早　鼠牙早　矯脚紅　金包銀　響打璫　石上珠　盧江早　茅裏苦　重陽糯

先の嘉靖韓州府志や江西各地方志に記された稲の品種と共通するものもあるが、独自なものもある。このことについて、万暦『贛州府志』巻三輿地志三、土産は次の如くいう。

虔在五嶺之北、田多秔稲、山多材木、沢多魚鮮、以土所宜也。其諸瓜蔬薬羽毛介蟲之類、皆所常有他州邑同。郡中居人、間蒔花、花有各種而多茉莉。利病蓋相半、亦時有更業者。城南人種藍作澱、西北大賈歳一至汎舟而下、州人頗食其利。

贛儲茶入貢。而寧都之豆、瑞金之瓜、信豊之茄瓠、与龍南・安遠之小猪、在属邑中、擅佳名、不可言奇。……鄧徳明南康記云、雩都土壌肥沃、宜甘蔗、味色最勝、一節数十碎。郡以献、御名一節蔗。問之雩人、罔知所出。豈土膏時有変遷邪。土之所産堇堇如是。……論曰、贛亡它産、頗饒稲穀、自豫章呉会咸仰給焉。兩関転穀之舟、日絡繹不絶。即倹歳亦櫓聲相聞。

江西辺地の山岳地帯の贛州にして山越えに広東、福建につながり、また川を下ると長江水系に結ぶ。米穀を始め、諸産物は特化すると同時に時の利を求めて変遷が激しいのである。

(Ⅳ)湖広（湖北・湖南）

漢陽府については、嘉靖『漢陽府志』巻五食貨志、土産は「稲麦多」とあるのみ、万暦『漢陽府志』巻五食貨志、土産もまた同じである。これは武昌府の正徳『嘉魚県志』巻上土産、穀に「秔・穉」とあるのみや、同、嘉靖『興国州志』巻三物産にも「州穀　稲黍稷麦菽粟」とあるだけである。

沔陽府も嘉靖『沔陽志』巻九志、第五食貨、物産五穀に「多稲」とあるのみ、襄陽府光化県も正徳『光化県志』巻三土産に「穀品　秔　稲　糯」とあるだけである。随州応山県も嘉靖『応山県志』巻二土産、穀に「稲・麦」とあるのみである。また、荆州府も万暦『荆州府志』巻三食貨書第五附、方産の条に稲の記述無く、府属の成化『公安県志』上巻、土産、穀類も「稲」としか記されない。

品種名の記載されている方志は次の通りである。

M1、弘治『黄州府志』巻二土産、黄岡県、五穀には、

秈穀⑭六十日　九十日　四節穀⑯百日穀（落田百日回食）　秔秈穀⑰麻秈穀
糯穀　黄殼糯⑩紅殼糯⑩白殼糯
黒晩穀　晩穀　鬍鬚晩　白鬚晩

と、秈、糯、晩の三種類についてそれぞれ品種名を挙げている。秈の六十日、九十日、百日及び麻秈、糯の紅殼・白殼などは長江デルタに至るまで共通してみられるものである。

M2、嘉靖『羅田県志』巻二食貨志、物産、稲類には、黄州府羅田県について、その品種名を挙げる。

(杭)七十日秈　百秈　四節穀　蓋草秈　油粟赤秈　雲南秈　瘦田秈　柳条赤秈　大粒赤秈　白花秈　烏風秈　矮脚黄秈　黄泥秈　脂頭秈　麻占穀　烏三節秈　黄粒穀

(晩)89三朝斉　望水白　水葡萄　紅桃熟　江南晩　黒殻晩　芭茅晩　子晩穀　珍珠晩　紅節穀　鬍鬚晩②香子晩　桐子穀

(糯)交秋糯　老人糯100紅殻糯19馬鬃糯　折二糯　界下其　鉄脚糯　馬牙糧103白殻糯　占糯　三百零糯　蜜蜂糯⑥羊鬚糯　黄瓜糯

黄州府が湖広で一番江西地方に近いだけにその稲の品種は江西に共通するものが多い。なお、晩稲（稉）も秈と同じ位に品種名が挙げられている点、そこに長江デルタと共通する品種名のみられることは注目しておくべきだろう。

M3、正徳『徳安府志』巻二食貨、土産、五穀の稲に、

(占)稲有占・糯二種。占自占城国来者、有種、方両月即熟者、謂之六十日、又謂之拖犁回、言耕畢即熟也。視此少遅旬日熟者、謂之七十日。又謂之四節谷(穀)、言四経節気即可熟也。又有候黄瓜実而登者、謂之黄瓜早。粒如蓮子而円者、謂之蓮子稲、布種即茂、不待蒔挿而芒黄者、謂之烏漫児。上人謂、布種為漫、皆早稲也。有米粒俱白者、謂之白占。粒麻米赤者、謂之麻占。穎穂長重者、謂之青稈占。結実一色者、謂之斉頭占。有米大而香者、謂之香稲。谷宜深水種、謂之騎牛撒。布種不挿而芒白者、謂之白芒兒。自黄陂来者、謂之黄陂赤。稈葉俱紅、不似黄稗者、謂之老人藉、言雖老人昏眊、亦可別識夷稗而除之也

(晩)。又有八月熟者、謂之八月晩。自蘇州来者、謂之蘇州晩。皆晩稲也。又有一種、不用水種、莖高穂長、粒大而米香者、謂之旱稲。

(糯)糯宜釀酒者。有粒白如鵝翎者、謂之鵝翎白。粒斑如虎皮者、謂之虎皮糯。候鷹始熟而粒赤者、謂之鷹来紅。芒如羊鬚者、謂之羊鬚糯。色烏者、謂之烏芒糯。粒斉一色者、謂之丸兒糯。粒紅米多者、謂之紅殻糯。釀始易熟者、謂之見缺消。又有柳条茅□□倉諸稲皆糯稲也。

やや不明な字があって一、二の種の確認ができないが、占・晩・糯にわたって、かなりの数の品種名を挙げる。やはり占が多いがその中には六十日、拖犁回（拖犁帰と同）のように江西や長江下流の江北江南に共通する名がある。深水種という騎牛撒は長江下流の深水紅・一丈紅と同じ東南アジア原産種の浮稲かと思う。なお、晩稲・粳米には蘇州から来たので名が

ついた蘇州晩というものがある。また旱稲も陸田用にある。糯では、虎皮糯、羊鬚糯等下流デルタの代表的銘柄名がみえる。それにしても、当地方固有の品種名も数多く、いずれも醸酒用である。

M4、嘉靖『蘄州志』巻二土産は占穀、糯穀、晩穀に分け、

占　江西早　臨江早　王瓜早　七十日　柳条赤　青管赤　茅秋秈　三友稲

糯　交秋糯　虎皮糯　蜜蜂糯　見釭消

晩　光頭晩　銀硃晩　香稲晩

占の江西早、臨江早、王瓜早、七十日、柳条占は、長江流域に広くみられる品種で、江西・臨江の名のあることから、占・秈が江西省で普及発達したことを物語っている。糯の虎皮糯は長江デルタの最もポピュラーな品種名である。

M5、万暦『襄陽府志』巻十四物産、穀品は、粘稲、糯稲に分けてその品種名を挙げる。

粘　六十（日）早　四節穀　七十早　銀包金　麻赤殻　麻白殻　苗穀赤冠　芒穀　黄瓜早　凡十三種

糯　馬牙　烏香　留如　等鬃　子紅殻　黄皮　鉄脚　柳条　細子　響皮　虎皮　燕嘴　粘黄　凡十三種

糯は十三種確認できるが、粘＝秈は九種までしか分らない。いずれにしても、襄陽府志の稲の品種は粘糯とともに湖広、江西に標準的にみられるものであることはいえる。秈のみで粳の無いことも確認されよう。

M6、万暦『鄖陽府志』巻十二物産、鄖陽府穀属には、

香穀　柳条糯　矮脚晩穀　蓑衣早　西山白穀　大小百日穀　俱房（県）

とある。因みに同府は最も陝西省寄り湖広最北部である。

湖南側では、岳州府の隆慶『岳州府誌』には物産の記事がなく、郴州について万暦『郴州志』巻十一、食貨志下、物産の五穀、稲も「有早中晩三種、糯、宜醸酒、有早遅二種」と品種名は挙げていない。

M7、嘉靖『常徳府志』巻八食貨志、物産、本府四県同、穀之属も「多稲」とあり、その品種として、

象牙占　藍天占　六占子　一節穀　両節穀　油赤穀　麻占穀　臨江早　犁耰早　飛上倉　救公饑　没水蓮　団頭早　竹枝花　小棗穀　折半穀　江西早　尽眉糯　柳条糯　紅辺糯　響鈴糯　芋蔴早　白糯　黄糯（名品甚多、土俗所呼又各不同、亦不能悉載也。）

これも、占、糯について多くの品種を挙げるが、それが江西地方の品種と一致するものの多いことは、臨江早、江西早という江西の地名のついた品種のあることとも併せて注目しておく必要があろう。

M8、嘉靖『衡州府志』巻四、土産、穀類にも、

両接早　救饑早　安南粘　模粘　油江粘　香大禾　晩大禾

鉄鬚糯　早糯

と、簡単ながら秔・糯にわたって品種名を挙げている。なお秔（＝占・秈）の救饑早は救公饑と同じものかも知れない。

岳州府慈利県は、府志に挙げていない物産を記し、稲の品種を示す。

M9、万暦『慈利県志』巻七物産、穀属は、

稲之品、有早晩紅分之分。早稲四月種、六月収、宜水田。晩稲五月種、八月収、則峪田早田皆種之。

糯有早晩。先上倉、猪牙早、香綿糯、柳条糯、紅糯。此其大凡也。

ただし、厳密に言えば秔稲の品種名は挙げていない。糯稲のみ五種が示されている。ここでも柳条糯は湖広一帯から江西にみられた品種である。

(v)**四川、附雲南、貴州**では、四川の夔州府について、正徳『夔州府志』巻三土産、穀類は「黍　稷　稲　粱　麦　荳　菽」とあるのみである。馬湖府も嘉靖『馬湖府志』巻下物産に、「穀多」とあるのみ。嘉定州洪雅県にわずかに品種名が確認される。

N1、嘉靖『洪雅県志』巻三食貨志、物産、稲之類には、

盖草黏　白蓮穀　香黏　斉頭黏　安南穀　黄泥黏（多）　白日黏（一名救公饑、種穫皆先諸稲。）　冷水穀　雲南早

南京早

白糯　紅糯（釀酒味佳）　尖刀糯　虎皮糯　猪脂糯　鴨子糯（多）　花穀糯（多）　硃子糯

秔糯各品種の内、秔では黄泥黏が、糯では鴨子糯、花穀糯が多いという。なお、糯の虎皮糯、硃子糯は下流デルタとも共通する。秔に安南穀・雲南早と並んで南京早のあることが注目される。

貴州地方では、

O1、嘉靖『思南府志』巻三土産、穀品に、

杉板紅　六十日　白露早

班稠糯　香禾木　猪毛糯　洗杷早　金釵糯　羅裙帯

と杭三種、糯六種が挙げられているが、ここにも金釵糯というデルタ代表銘柄の品種名がみられる。

嘉靖『普安州志』巻一輿地志、土産、穀類は「粘穀、糯穀」とあるのみである。

雲南では、嘉靖『尋甸府志』巻上食貨、穀属には「稲　黍……」とあるのみである。

O2、隆慶『楚雄府志』巻二食貨志、物産、稲其品十とあり、

杭　秫　紅芒　黄殼　虎斑　白　黒　烏嘴　白殼　粳

と挙げられている。ここにも、紅芒・黄殼・虎斑・烏嘴・白殼といった長江デルタにもみられる品種名が確認される。

(VI)東南海岸〔浙江南部、福建〕

まず、浙江南部の台州府では、

P1、万暦『黄厳県志』巻三食貨志、物産、穀之属、稲に、「地累有紅有白」とあり、続いて以下の品種名を挙げる。

杭　白散　烏散　占城（以来自占城名）　旱稜（宜高田）　水稜（宜下田）　縮頭紅　厳州旱㊳八月白　遅青　随犁帰（一名六十日）（以上皆杭）

糯　早糯　晩糯㊺冷水糯（宜山田）　矮糯（秋中穫）　黄糯　烏節糯⑯臙脂糯

杭糯の数種品種を挙げるが、杭の八月白や糯の冷水糯・矮糯・臙脂糯等長江下流デルタと共通する品種名を挙げている。

なお、土地の高低山田等の状況に合せて適宜の品種の栽培が行われるという指摘は重要であろう。

同府の海門県について嘉靖『海門県志』巻四食貨、土産、穀類は「粳稲、糯稲」と分類するだけで品種名を挙げていない。

P2、太平県では、嘉靖『太平県志』巻三食貨志、物産、穀之類は、稲を「夏熟曰早禾、秋熟曰中禾、冬熟曰晩禾」に分け、

早禾　蒙裏白（一名梅裏白。穀有芒、又名糯米白、白色如糯米）　随犁帰（一名六十日）　占城（種来自占城）　九十日

（満三月而熟）　旱稜（宜高田）　水稜（宜下田）

中禾　紅地暴（一名紅婢暴、米紅）　白地暴（米白）　班地暴（穀班）㊳八月白　烏散㊹金裏銀　遅青　稈地暴　早糯

糖糯　烏節糯

晩禾　白粘秈　黄才秈　纏枝秈　烏嘴秈　櫻珠秈　黄板秈　白香秈　釣竿秈　白帰（一名白董）　烏稜　南稜　黄糯　西

糯（一名細糯）　麻糯　矮子糯⑯臙脂糯（一名荔枝糯）　混酒糯　寄生（以寄種早禾中、故名、一曰晩児）⑲金城（水

郷畏水、晩稲少。山郷畏旱、晩稲多。宋大中祥符五年、以両浙微旱、使於福建、取種三万斛、分給種之。今土俗謂之百日黄。穀之種類雖多、總其目、曰秔、曰糯爾。所謂黏与不黏者、是其別云。）

早・中・晩に分けたため、秔も糯も、また秈（籼）もその中に混じって分類されている。秈が晩禾に多いのは意外な感がするが、割注に「山郷畏旱、晩稲多」とあって旱に耐える秈が天候の関係から晩稲になっている。これもこの地の地域性を示すものである。独自な品種名が多い中で、早禾の随犁帰（六十日）中禾の八月白、金裏銀、晩禾の臙脂糯、金城など、下流デルタと共通する品種も目立つ。

P3、万暦『仙居県志』巻四食貨、穀属には、

六十日　黄巖早　藍溪白　縮頭紅㊹金裏銀　温州青　霜下晩　黄扁糯　冷水清　長稈紅　早糯　晩糯　香糯

以上、台州府下、黄巖、太平、仙居の明代地志物産を調べたが、その稲の品種には、既に南宋の陳耆卿、嘉定十六年（一二二三年）修『赤城志』巻三十六、風土門・土産・穀の属・稲にみえる品種が数多い。新出は、秔の縮頭紅、金裏銀、黄巖早、藍溪白、温州青、霜下晩など、糯の早・晩・香糯などであろう。なお台州もまた、浙江北部や南部福建との関係のあることも理解されよう。

金華府では、嘉靖『浦江県志』巻二民物志土産、五穀は「邑土高磽、五穀多早種、乃有穫」とあって、早種が多く、収穫が有るという。品種は挙げない。正徳『蘭溪県志』巻一風土類、物産、稲之類も、

有秈糯二種。其熟有早中晩三時。其粒有紅白二色。名品最多、不能悉具。

とあって、やはり品種名を示さない。秈糯とあるから、秈が多く、粳は少ないことだけは確認されよう。金華府下で稲の品種の記載のある地方志は義烏県志である。

P4、崇禎『義烏県志』巻六物土考、物産、穀之属に、

秔　稲之不黏者

早稲　望犁回⑭紅蓮⑯早稲六十日⑩金裏銀㉜黄秈

中稲　早稑　秤幹稑　斉頭黄　撒栢　三百粒　闊辺

晩稲　茨菰秈　烏嘴秈

糯　稲之黏者。宜釀酒。

早糯　黄糯　白糯

晩糯　綿羊糯⑯臙脂糯㉓烏鬚糯

ここでも、秔の紅蓮、六十日、金裏銀、黄秈、及び糯の臙脂糯・烏鬚糯がデルタと一致する品種名である。

P5、万暦『湯溪県志』巻三食貨志、物産、穀之品に、

粳糯　早白禾　早赤禾　晩白禾　晩赤禾⑩金裏銀　白芒兒　烏芒兒

とあるが、ここも秈が多いかも知れない。

厳州府では、嘉靖『淳安県志』巻四、物産、穀に「秔有早稲、晩稲、紅稲、白稲。糯有秋糯、晩糯。」と時期的種類を挙げている。

P6、万暦『遂安県志』巻一食貨志、物産、穀類にも、

秔有早稲、晩稲、紅稲、白稲。糯有秋糯、晩糯、長莖糯。

とあり、殆ど淳安県志と同じだが、こちらには長莖糯という品種名らしきものが附加された。

嘉靖『寿昌県志』巻二物産、穀之属も「早稲　早糯　晩糯」とあるのみ、早稲＝秈と糯の栽培を伝える。

衢州府では、崇禎『開化県志』巻三賦役志物産に「穀之品、有秔秫早稲云々」とあるのみであるが、

P7、万暦『常山県志』巻三土産、穀類、稲の注記には、

其種甚衆。大率有秔有秫。秫即糯也。秔糯俱有紅白二色、又或有芒秫。早熟。最蚤者、名天公蚤。住来即黄、大与貧民接飢。秫有至仲冬熟者。

とあり、天公蚕（早）という早熟種が指摘されている。

P8、天啓『江山県志』巻三籍賦志、物産、穀類には、稲、糯とも数種有るとし、

稲　江西早　五十日　住来黄　建陽早　金裏銀　太平早　龍泉禾　湖（州）白　八十（日）白　晩稲

糯　重陽　八月　知鶏　三百粒　上硃　黄梔　連根　毛糯　開化　金城　麻子　処州

山を越えれば、江西広信府また福建建寧府に至ることのできる衢州府江山県だけに実に浙江各地、江西・福建地方の各地名を冠した品種名が数多く見出される。その反面、デルタに関係した地名や稲の品種がわずかに湖州白だけである。

P9、万暦『衢州府誌』巻八国計志、物産、穀類、稲は「稲曰粳不粘、食米也。稌曰糯粘、酒米也」とあって、以下品種名を挙げる。

江西早（六月熟）⑩金裏銀及太平早（七月熟）　晩稲（十月収）

重陽糯　湖州糯　処州糯　麻子糯

数はあまり多くはないが、秔米は早稲が多い。糯米は酒米に作られ、種が多い。江西早、金裏銀、太平早、湖州糯等他地域の地名を冠した品種が目立つ。

処州府では、

P10、嘉靖『宣平県志』巻二土産、五穀之属には、

蘭溪白（四月種六月刈）⑩金裏銀（四月種七月刈）　六十日黄（四月種六月刈）　蔡家秈（五月種八月刈）　青田晩（仝上）師姑晩（色白味甘）　雉鶏糯　雪稲（以上三色俱五月種十月刈）㉖下馬漢（有芒十月刈）

早糯（八月刈）　九月糯　晩糯（十月刈）　烏節糯（八月刈）

なお、同県の早晩の時季は、五穀之属に附した註記によれば、「芒種前後種、大暑節後割者為早禾。芒種夏至種、白露節後割者為中禾。其晩禾、則寒露節後収也。」という。地名がついたものも蘭溪（金華）青田（処州）と近隣である。

温州府では嘉靖『温州府志』に物産の記事なく、同府楽清県では、

P10、永楽『楽清県志』巻三土産、穀之品、稲に秔、糯に分けて、

秔　地暴（粒尖細、紅白二色）　紅芒（芒赤）　占城（自占城国得種、故名）　白散（多芒、色白）　水稜（粒大純

赤）　軟稈（穀白、粒大、秋中熟）　百箭（芒勁如箭）

糯　早稲（初秋熟）　晩糯　冷水糯（宜山田）　矮糯（秋中穫）

とあり、また同県の後の県志にも、

P11、隆慶『楽清県志』巻三財用志、物産、穀之品に杭糯に分け、

杭　香杭稲　紅蓮稲　箭子稲　師姑稲　閃西風　雪裏揀　稲公揀　白芒　穲稗稲　麦争場　無名稲　野稲

糯　趕陳糯　師姑糯　青趕糯　秋風糯　鉄梗糯　矮児糯　金釵糯

とあるが、これが杭糯とも全部が長江下流デルタの名称と合致し過ぎるので、かえって疑わしい。

P12、嘉靖『瑞安県志』巻三田賦志、物産、穀類には、品種を挙げその性質を述べる。

（杭）白散（多芒、色白、小暑即熟。但非上品所不多。）

地暴（有紅白二色。粒尖細。七月穫。）

水稜（一曰小青、粒大芒赤。）

占城（相伝自占城得種、最耐旱、有紅白二色。）軟稈（色白粒大、味甘。八月穫。穫後其根復者、無異初稲。謂之孚稲。十月穫。）百箭（芒勁寄種軟稈）

白西（芒白）　龍秈（粒大米白）　磊睨（無芒）　紅羅帳（穎赤色、故名之）　金裏銀（穀赤米白）

（糯）早糯（一曰大糯。七月穫。郷人用造新酒。但未受霜気、味弱。不可造経冬酒。）

晩糯（粒大而堅。十月穫。宜造冬酒。其名不一。有黄糯、白糯、烏糯　矮糯）　青糯（初冬穫）

金水糯（即水糯。宜山田種之。）

一年二期作用の軟稈など、華南的特色が出てきた品種である。

福建地方では、まず福州について、

Q1、万暦二十四年修『福州府志』巻八輿地志、食貨、物産、穀之属に、

稲大都二種、曰粳、曰秫、名品甚多。志其大者、春種夏熟曰早稲、秋種冬熟曰晩稲。歳可再熟。其歳一熟者、曰大冬。

（※）秫与早稲同熟者、曰早秫。与晩稲同熟者、曰晩秫。与大冬同熟者、日大冬秫。粳米有紅白二色。再熟之稲、其名

又有曰黄芒、曰金洲、曰占城、曰白香諸種。

この地方では、稲は粳秫ともに、早稲（早秫）、晩稲（晩秫）があり、それを合せて一年再熟するものがあった。それに対し一年一熟は大冬（大冬秫）という。これは両広まで拡がる一年二期制稲作のパターンである。その品種名としては、黄芒、金洲、占城、白香が指摘されているのみであるが。

Q2、万暦四十一年修『福州府志』巻三十七食貨志十二、物産、穀之属、稲の右万暦二十四年府志、物産文の〔※〕以下のところには、

又有各種。曰早占、山田可種、附郭則少。曰天降来、従霜降後熟。曰董提、曰黄芒。与早稲同熟、曰占城　与晩稲同熟、曰稲。早稲既穫後、苗始蕃、亦晩稲同熟、曰土稲。多出洲田、其歳再熟者、又有、曰金洲、曰白香。秫又名糯。与早稲同熟者、曰早秫。与晩稲同熟者、曰晩秫。与大冬同熟者、曰大冬秫。

早稲の早占、天降来、晩稲の董提、黄芒。早稲と同熟の占城、晩稲と同熟の稲。早稲が収穫されて後、再び苗が生育し、晩稲と同熟するのを土稲といい、多く洲田に出、その再熟する用の品種は金洲、白香というとある。

Q3、崇禎『長楽県志』巻四食貨志、物産、稲には、

春種夏熟、謂之早稲。中有紅芒、早白、金洲、九里香、占城、霉裏白数種。又有秫稲亦名糯、可釀酒。早稲既穫、再種、至十月穫、名晩稲。早稲既穫復発、俗謂之秬。又有芒米俱赤、与早稲混種、逮早稲既穫、方発、至十月穫、謂之稲。

福州府志とほぼ相似た文章で、早稲種に紅芒、早白、金洲、九里香、占城、霉裏白の品種が指摘される。

Q4、万暦『古田県志』巻五食貨志下、物産、穀之属には、品種の性格を説明して、

赤早（穀黄、米紅、無芒、七月収）。

白早（穀米俱白、亦名古田早、八月収。）

白稲（穀米俱白、有芒、十月収。）

降米（穀米俱白、無芒、可作麺、九月収。）

芒啄（穀米俱白、芒短、十月収。）

紅芒秫（穀紅、米白、而大有芒。）

猪骨秫（米白、無芒、十月収。）

赤早、白早、白稲は収穫時期が七、八、十月とほぼ早・中・晩三期となろう。赤早はQ2万暦四十一年府志の早占に当るか。降米、芒啄も晩稲か、晩糯に当ろう。紅芒秫、猪骨秫と併せて、その品種名称は独自なものである。なお、福州府下の万暦『永福県志』巻一地紀、物産や嘉靖『羅川志』巻土産志、穀には品種名やその性格の説明などは無い。

次に福州府より海岸沿いに浙江寄りの福寧州では、万暦二十一年修『福寧州志』巻一輿地志、土産、穀に、

稲有早稲、晩稲、秫稲。又有分遅早、一年両穫。宋州人謝邦彦詩、嘉穀伝来、喜両穫。薄田不負四時耕。

これも一年両穫を中心とした福建水稲作についての証言で、それは既に宋代の福建人謝邦彦が詩に取上げるほどに有名であったが、その一年両熟、二度の収穫を可能にしたのは嘉穀即ち占城稲の福建への導入であるという。福寧州下の寧徳県について、

Q5、万暦『寧徳県志』巻二食貨志、物産に、

稲、春種夏熟曰早稲、春種冬熟曰晩稲。早稲有白早、有烏早、有金城早、即占城早也。近有鋪氈早、先晩稲一月而熟。晩稲有白稲、殻・米俱白。有紅稲、穀赤、米白。有紅米娘、殻黄、米紅。有光頭郎、無芒米白。有米秀、穂長米白。有秫稲、即糯米也。閩中記云、閩人釀酒之余、歳時蹂粉、以為糰糕粽粿之属。有紅秫、有黄巵秫。近時有一種米純紅、性極柔膩、蹂為粉、若丹粉然。

早稲としては、白早、烏早、金城早郡占城早があったが、近くでは舗氈早がある。晩稲には白稲、紅稲、紅米娘、光頭郎、米秀など。糯には紅秫、黄巵秫、また最近では純ら紅い秫があるという。

次に福寧の内陸で浙江、江西省境の建寧府では、

Q6、嘉靖『建寧府志』巻十三物産、穀には

六十日早　粟　大糯　小糯（已上倶建安産）　龍鳳早（建安、瓯寧、崇安三県産）　半冬白　師姑早　九里香（已上建安、瓯寧、崇安、浦城四県産）　大早　小早（已上建陽、浦城、松溪、寿寧四県産）　天降早（建安、建陽産）爛泥早　七娘禾　小白禾　大白禾　小烏禾（已上倶建陽産）　野猪愁　無芒秫　真珠纍　麻子秫（已上倶建陽、崇安産）　公婆秫（建陽・崇安・寿寧産）　銀珠秫（建陽・浦城・崇安産）　早禾　白禾子　烏禾子　厚芒秫　下馬看（已上倶崇安

産）白芒　黄穀（已上浦城、松溪、寿寧産）粳穀　白秈早　烏龍牙（已上俱浦城産）　紅糟秫（浦城、松溪産）　舗地錦　温州早　呉家伝　大師姑　小師姑　青絲禾　荔枝禾　猴尾秫　烏節秫　重陽秫　白芒秫（已上俱松溪産）　烏牙秫（松溪・寿寧産）

Q7、建寧府各県志では、嘉靖『建陽県志』巻四戸賦志、貨産、稲に、

稲、有粳有糯。粳食米也。糯酒米也。有一年一収者。有一年両収者。謂之大冬稲、其米粒大。両収者、春種夏熟、為早稲、秋種冬熟為晩稲。又一種占稲、無芒而粒大、出占城。其色有白、有斑、有赤。湘山野録云、宋真宗……。蓋其稲能耐旱也。稲之名品甚多而土俗所呼有小早。

とあって、以下若干の品種を挙げる。

（早）　小早　大早　天降早　爛泥早　半冬早　師姑早

（禾）　七娘禾　小白禾　大白禾　小烏禾　大烏禾

（秫）　公婆秫　無芒秫　麻子秫　銀珠秫　九里香　野猪愁　珎珠㚸

早は一年両収用、禾は一年一収用と思われる。府志と記述が一致するものは、小早、大早、天降早、爛泥早、七娘禾、小白禾、大白禾、小烏禾、野猪愁、無芒秫　真（珎）珠㚸、麻子秫、公婆秫、銀珠秫で、府志に建陽産とあるものはすべて県志に記載されている。逆に県志の、半冬早（白）、師姑早、九里香、大烏禾は府志には挙げられていない。

Q8、万暦『政和県志』巻三土産誌、稲に、品種名を挙げている。

大早　六十日　江西早　清流早　禾　大糯　小糯

Q9、崇禎『寿寧県待誌』巻上、物産に、

早稲、有烏節早、赤芒早、及紅白金成、晩稲、色黒芒長者曰大烏、黄色無芒者曰光生。更一種曰黄栢。蕋紅者曰赤殼。又有大紅、名政和紅。

糯米、有紅糯、白糯、肥糯、真珠糯四種。

この県も早、晩、糯三種であるが早と糯が多い。なぜか晩稲には紅い米が多くみえる。

次は延平府について、

Q10、万暦『将楽県志』巻一輿地志、物産、穀之属、稲には、

有早晩粳秫、種類甚多。惟占城種来、自占城国。百日黄種、乃徐友敬、自江右伝至。夏秒即熟、可刈。

Q11、万暦『永安県志』巻四田賦誌、物産、穀之属に、

早稲　金成・針穀

晩稲　秫

Q12、万暦『大田県志』巻八輿地志、物産、殻之属に、

早仔　大稲　粟　麦　秫　荳　黍　蕎麦　油麻、金城早　八日白　長芒

Q13、崇禎『尤溪県志』巻四物産志、穀之属、稲に、

（糯）有秔、有糯。糯亦名秫。秫有虎皮、黄蘘、花眉諸種。其顆大純白、気力足者、謂之半溪秫。興文所産為最、省会釀酒、俱資於此。

（早）杭則有安南早、江西早、六十日早、宜初春種。

（白）白柏・白占・東穩之類、宜秋夏種。

又一種、附春稲種而与秋同熟、謂之寄種、亦秋属而気味差減。

其収穫有大冬、二収。深山気寒、春尽種而冬熟者謂之大冬。平原地煖、春初種而秋熟、秋再種而冬再熟者謂之二収。邑在深山多寒、稲属之二収者少矣。

福建の内陸部、延平府でも、水稲の一年両収はあったようで、当地の早稲はそのためのものだという。ただし、実際には右文末に言うごとく、両収は少ないという。この尤溪県では酒釀用の糯米の良質な品種が尚ばれている。

福州府と泉州府との中間、興化府について、

Q14、万暦『興化府志』巻一輿地志、物産、五穀、稲に、

稲有一歳両収者、春種夏熟曰早穀、既穫再挿、至十月方熟曰穤。又有一種謂之占城、無芒而粒細、俗呼為占穀。呉都賦国税再熟之稲、閩亦有之、第輸税。蓋蔵比呉中、百不及一。

糯、字林云粘稲也。閩中記云、閩人供釀之余、歳時糯粉為糰粽糕粳之属。

早穀、占城の紹介の他、早稲と晩稲の組合せで一年両収稲について触れている。

次に、福建で稲の品種について最も詳しい泉州府について、

Q15、万暦『泉州府志』巻三輿地志下、物産、稲之属に、各品種の性質を説明する。

早稲（有赤白二種。晋江春種夏収、南安等県稍遅、徳化有早仔、師姑早。）

晩稲（有紅白二種。秋種冬収、七邑倶有。）

大冬（春種冬熟、有赤白二種。粒大殻厚、気完。七邑倶有。）

寄種（与早稲同下種、早稲刈後、更発苗、至十月結実、有芒米赤色。又一種無芒。晋・南・同・恵出。）

青晩（埭田多種之。其種与収俱遅於早稲一月、米色赤。晋・南・同・恵出。）

占城稲（耐旱、其色有白、有斑、有赤。自種至熟、僅五十余日、涸燥之地、多種之。七邑倶有。）

畲稲（種出獠蛮。必深山肥澗之処、伐木焚之、以益其肥。不二三年、地方耗薄、又易他処。山県倶有。晋江惟四十都七以後有之。）

白香（春種秋熟、有芒、殻黄、米白、味香。又一種無芒更美、名過山香。晋江・南安・永春出。）

降来（夏種秋熟、有芒差短、殻米倶赤。南安・同安出。）

大尖（春種秋熟、殻赤無芒、与早赤大同小異。又有小尖、比大尖差小、倶南安出。）

中灌（五月種十月収、殻赤米白、南安出。）

新留（春種。同安出。）

河南早（春種夏収、南安出。又有河南、秋種、同安出。）

白柳（秋種、晋江・南安・同安出。）

烏芒（漬種甲微、折投土中、乃発芽抽苗、与赤晩同熟。鹵地之尤鹹者宜此。恵安出。）

林鳳　藿香　一秋紅　紅芒　天上落（已上永春出）　八月白　蘇州紅　烏稲　金城早　栗殻　尤溪早（已上徳化出。）

已上秔稲

早秫（春種夏収、晋江、安溪出。）

晩秫（秋種冬収、晋江出）
大冬秫（春種冬収、或白或赤、七邑倶有、山県多。）
赤蒡秫（春種冬熟、蒡穂赤色、米白、即荔枝秫、南安・同安・徳化出。）
牛頭秫（春種秋熟、一名好殻、而清香。南安、出。）
白鬚秫（即赤六、南安出。）
白占秫（同安出）　花眉秫（同安出）　虎皮秫（同安・永春・徳化出。）　過山香秫（同安出。）　龍牙秫（永春出）　班占秫（永春出）
已上糯稲。

泉州府属の各県方志をみると、

Q16、嘉靖『徳化県志』巻二物産、稲には、

杭之属　早仔　長芒　八月白　蘇州紅　烏稲　金城早　師姑早　田大熟　占稲　赤米仔　栗殻　尤溪早
糯之属　赤秫　無芒秫　白秫　虎皮秫　銀硃秫

若干の差違があるようだ。やはり泉州府安溪県について、

Q17、嘉靖『安溪県志』巻一地輿類、土産、穀類は、

稲、有粳有糯。粳食米也。糯酒米也。有一年一收者。有一年両收者。一收者、謂之大冬稲、其米粒大。両收者、春種夏熟為早稲、秋種冬熟為晩種。又一種占稲、無芒而粒大、出自占城。其色有白、有班、有赤。湘山野録云……

とあり、以下品種名を挙げる。

白香　白占　青占　早赤　烏秫　畠稲

右の最後の畠稲については、「亦能耐旱、地肥則長、不一二年又易他処。非農家所能也」とする。特異な耐鹹用稲のある恵安県では、

Q18、嘉靖『恵安県志』巻五物産、穀属には、

稲之品、先後遅速、大率繋於地気依山、山高気深、寒常多。暮春漬苗生、甚遅、至冬乃熟、謂之大冬。分赤白二種。白

中亦有杭有糯。顆大殻厚、味香。気力完足、雖一種而收入兼二季所有者。平原之地煖常多、驚蟄後、即漬種、至秋初而熟、謂之早稲。又翻治其田、種冬稲。種類頗同大冬而気力差減。冬稲皆赤杭米。
青晩、耐風与水旱、亦能勝鹵気、埭田多種之。其種与收、倶遅早稲一月。又有烏芒稲、種漬甲徴拆投土中、乃発芽抽苗、与青晩同熟、鹵地之尤鹹者宜之。穀粗厚、味酸渋不香。
占城稲、耐旱。瀕海、春多雨、至夏常旱、此穀自種至收、僅五十日。備旱之地、多種之。亦有白赤二種。
畲稲、種出獠蠻、必深山肥潤処、伐木焚之、以益其肥。不二三年、地力耗薄、又易他処。近漳州人、有業是者、常来賃山種之。

ここには一年一收用の大冬種として赤杭米、風・水・旱及び鹵（アルカリ土壌）に強い青晩、及びそれと同時に種え、より鹹気の強い土に種える烏芒稲、赤白二種の占城稲、それと焼畑農業的な畲稲が品種として示されている。畲稲は山地開拓用でもあろう。

Q19、嘉靖『永春県志』巻一輿地志、物産、穀、稲に、

粳糯名品、皆甚多。所呼亦隨地。在永春、
（杭）糯有林鳳・白香・藿香・一秋紅・紅芒・白粳・天上落・占穀。
（糯）糯有龍牙、虎皮・斑占・長芒。
要不能尽書。皆歳一熟。其米皆有紅白芒粳米。林鳳・白香、其最嘉者、歳二熟者。春曰早穀、六月收。晩曰早藁、十月收。其米皆赤。本地種之少。按二熟之穀、較之一熟、所獲亦相等。但二熟之穀、少怕亢旱、故種之広。宋馬益詩云、両熟潮田世独無、蓋謂是也。永春水田灌漑少荒旱之憂、故所種皆一熟占穀、来自占城、有白斑赤三種。湘山野録云。……。愚按占城之穀、不独耐旱、其熟必在五月、比諸穀先之故。有一種、曰安南早、又有一種、曰埔稜□、自占城種之旱地。

一年再熟、両收と言ってもその收穫量は一收と同じであり、再熟を行うのは亢旱対策だといい、占城稲導入もそうだという。ただし、占城稲は耐旱のみならず、やはり早く收穫できることがメリットだという。

次に漳州府に移ると、

Q20、嘉靖『龍溪県志』巻一地理、物産、穀之属には、

稲品、先後遅速、大率繋於地気依山、山高気深、寒常多。於春夏之交下種、至秋未熟、謂之大冬。有赤白二種。白者有杭有糯。顆大殻厚、味香。気力完足、雖一種而收入、兼二季所有。平原之地、煖常多、驚蟄後種、至夏未熟。有安南早、江西早。安南最易、江西稍遅、通謂之早稲、又翻治其田、種冬稲。早稲種類頗同大冬而気力差減。冬稲赤杭為多。又有白柳・斑黏二種尤佳。

この文は先掲の嘉靖恵安県志の物産の文章と殆ど同じである。一年一收、大冬種の赤杭は同種である。早稲の安南早、江西早、冬稲の自柳・斑黏は恵安志に見えなかった記述である。

Q21、万暦『帰化県志』巻一輿地志、土産、穀之属には、

京成（米色白、七月熟）　冬京成（米色白、十月熟）　重陽紅（九月熟）

稲（有赤白二種、九月熟）　糯（色白、九月熟）

あまり、品種の数を挙げない。また、崇禎『汀州府誌』巻四風土誌。土産にも、一年両熟、両收の記事はあっても、品種のことには詳しくない。

(Ⅶ)両広〔広東、広西〕

まず、珠江デルタの広州府についてみると、万暦『順徳県志』巻一地理志、物産に、

不能異於他邑、猶録之備覧観焉。穀、多稲、多黏、有糯。黏、糯皆稲也。其名甚繁。

とあるのみで品種名を示さない。万暦『新会県志』巻二物産も穀に「多黏品、多稲品、多糯品」というのみである。

R1、嘉靖『香山県志』巻二民物志、食貨、穀品、稲に、

稲有三種。黏之類曰、占城稲・抛犁・望斉黏・交趾黏・赤黏・自黏・黄黏・大黏・花黏・鹹黏、遅黏。

糯之類曰、大糯・湖広糯・陳妹糯・新婦糯・烏糯

杭之類曰、稌杭、赤杭

又有畲稲、名早蓮者、徭人刀耕火種、味尤香美、惟横琴有之。

黏＝秈＝占、糯、秔にわたって品種を挙げる。

R2、屈大均『広東新語』巻二、地語、沙田に、

広州辺海諸県、皆有沙田、順徳、新会、香山尤多。農以二月下旬、偕出沙田上結墩、墩各有墻柵二重以為固。其田高者牛犁。低者以人秧蒔、至五月而畢、名曰田丁、始相率還家。其傭自二月至五月謂之一春。毎一人一春、主者以穀償其値。……其田皆一熟、或種秋分、或白露、或霜降、必兼種之。使自八月至十月、月月有收。其收八九月熟者、曰小禾、秋分・白露、霜降等種是也。以十月熟者、曰大禾、赤秈是也。沙田鹹鹵之地、多種赤秈、粒大而色紅黒、味不大美、亦名大秈、皆交趾種也。其黄秈、花秈、惟内地膏腴者多種。

珠江クリーク、デルタの沙田には八九月熟の小禾種の秋分・白露・霜降があり、十月熟の大禾、赤秈という品種がある。内地には黄秈、花秈という品種があり、いずれも交趾・占城稲という。

珠江デルタ東方では、嘉靖『恵州府志』巻七下、賦役志下、物産附には、

五穀　多黏　多糯　多糯（二熟者少一熟者多）　有菽　有麦　有黍　有稷

とあり、黏（占・秈）、粳（粳）、糯（糯）の稲の種類だけを示している。

潮州府潮陽県の隆慶『潮陽県志』巻七、民賦、物産志、穀属も、

稲……秋有早秋、黏、烏秋等類。

とあるのみで、品種名を挙げていない。

R3、韶州府仁化県では、嘉靖『仁化県志』巻二土産、穀類に、

稲（有陸拾日熟者。有壹百日熟者。）

粘　有　雲南粘　捌月粘　鼠牙粘　数種。

糯　有　蕪糯　重陽糯　烏鬚糯　羊膏糯　数種。

とあり、粘（占・秈）の雲南占、八月占、鼠牙占は広東、福建・湖広に広くみられる種であり、糯の烏鬚、羊膏（羊脂）は長江下流デルタの代表的名柄であることが注目される。広東北部湖広（湖南）や江西との交通の要衝の地である韶州地方の地域性を示している。

なお、同韶州府翁源県の嘉靖『翁源県志』物産、穀部は「粳　糯　粘」とあるのみである。

R4、廉州府の欽州では、嘉靖『欽州志』巻二食貨、物産、穀属に、

毛禾（正月種五月熟。只用点工。有光毛二種。宜灰糞。）　六禾（三月種六月熟。有紅白二種、宜腴田。）白禾　膀稔（俱三月種七月熟、米白、宜腴田。）　八月粒（四月種八月熟、米白而香。）　坡禾（四月種九月熟。種子不浸、宜肥坡。）　烏独粒（皮顆尖而黒。）　又粘（米細而紅）油粒（米円而潤沢。俱四月種十月熟）　畠禾（五月斬山木、種于高嶺。十月熟。次年、移植他処。）赤禾（五月種十月熟。米赤）

赤陽糯（有紅白二種、紅者可造酒）　羊眼糯（俱四月種七月熟）　蝦鬚糯　貝糯　馬蜆糯（有紅白二種、俱宜中田）　晩秧糯　白殻糯　紅鬚糯　斑鳩糯　花殻糯　臺糯　老鴉糯（鬚殻俱黒、米白）　母狗糯（鬚殻黄、米粗）　馬鬃糯　広糯（俱五月種十月熟）

糯が割合に多く、馬鬃糯等は長江デルタの糯種に一致する。

R5、万暦『雷州府志』巻四地里志二、土産、穀、稲之種に、

早稲（二月種六月熟）

早黏（熟種与早稲同、而米最白。種自霊山県来）

六十日（種六十日而熟）

香杭（粒小性柔而味香）　粳稲

古杭（性柔次秫）　珍珠稲（米稍円而色潔）

黏稲（小黏者米最佳、赤白二種）

光芒稲（一年一熟）　長芒稲（一年一熟）

紅芒稲　烏芒稲

秫稲（性軟有数種。雷公秫　虎秫　狗神秫　牛豆秫　番秫）

百穄稲（坡田種）　黄穲稲（米極潤白）

芮稲（二月種十月熟、遅於諸稲）

界稲（十一月種、至次年四月熟、界在両年、故名、出徐聞。）
山旱（破山種）。

極めて特殊な、二月種十月熟といった長期の芮稲や十一月から次年四月といった裏作の界稲など中国南端の地らしい品種がみえる。その名品種の例えば秫稲名称などもユニークである。

R6、海南島の万暦『儋州志』第一冊天集、地理志、土産、稲は杭稲、糯稲に分け、

杭　赤粘　烏斉　百線　香禾　珍珠禾　白肉　赤鬚　山禾（黎人伐山種之、曰刀耕火種。早割藝之、三月即熟）　鼠歯
偶穫　数種。

糯　黄鱣　貝子　黒糯　早割　交阯　五月光頭、数種。

ここも名称には地方的特徴が認められる。

R7、瓊州府の正徳『瓊臺志』巻八、土産上、穀之属は「稲　杭糯二種。杭為飯米。糯為酒米」とし、その品の著なる者を杭九種、糯九種示している。

杭　百箭　香杭　烏芒　珍珠　鼠牙　東海　早禾　山禾（択久荒山種之。有数種、香者味佳、黎洞則火伐老樹、挑種、謂之刀耕火種。）　占稲（有数種、性耐水、択高田、五六月種、七八月收。有播種六十日熟者、謂之六十日。）

糯　黄鱣　黄鶏　烏鴉　光頭　九里香　小猪班　狗蠅　蝦鬚　赤米（出崖）

海南島は安南ベトナムに近く、少数民族の黎人達が行う刀耕火種といった、焼畑農法的な稲作も行われていた。なお、先の儋州志と共通するものもみられる。また、ここにみえる早禾、山禾はみないわゆる占・稲と思われるが、これの起源はいつかなどは、古そうであるが、はっきりしたことはわからない。

次に広西地方について若干の事例を挙げておこう。

S1、万暦『南寧府志』巻三田賦志、土産、穀品、稲に杭・粘・糯三種ありとし、品種は、

杭　毛粳　六月粳　八月粳

粘　白粘　紅粘　早粘　鼠牙粘　長腰粘　六月粘（即宋真宗大中祥符中、遣使至占城国取種、分布江淮諸処。其不言粘者中土之種也。）

糯　紅・白・黄皮・黒皮諸種。早糯　畲香糯　黄鬚紅糯　黒鬚糯　六月糯　光糯　毛糯　狗眼糯　赤陽糯　黄胴糯　班糯
　鵝鳩糯　銀絲糯　泥糯　魚包糯　飯糯　香糯

秔・粳が少なく、粘・秈が多い。しかし、それより糯が多いのは、これが珍重されている少数民族の影響があるのかも知れない。長江デルタの品種名と全く一致しないことは注目してよいであろう。

S2、万暦『寶州志』巻四賦役志、土産、穀之品には、

多黏（曰）黄・白・早・晩・鼠牙・鷓鴣翠・班
多粳（曰）赤・白・長毛
多糯（曰）白・黄・紅・光・烏鬚・早

糯の烏鬚、即ち烏鬚糯種は長江デルタによく知られた品種である。

広西では他に、崇禎『梧州府志』巻二物産、穀之属に「有稲、粘糯粳」とあるが品種名を挙げていない。

結　語

以上、明代地方志を中心として、十六・七世紀中国における稲の品種を地域的にみてきたが、(I)－(Ⅶ)の地域ごとにその特色や性格をまとめ、結論を出したい。

(I)**長江下流デルタ**　この地域は明清期に北京上供の白糧粳米の主要産地であったために粳米がつくられた。その品種は秔・糯ともに宋元以来の伝統種が比較的に重視されて栽培されたが、湖州の三穂千ほか、新種の登場も数多くあった。宋元以来のものも、確かに陶汰されて姿を消した種（例えば『琴川志』の九節稲や『玉峰志』の半夏稲・稗稈稲など）もあったが、明清期に新たに名称を附せられたものも数多い。また、この地域でも、常州府や鎮江府には秈、占城稲種が盛んに栽培され、それは長江水運によって江西方面から伝来したものと思われる。それにしても、この地域は中国水稲区では、唯一の粳米優勢地区である。ただし、地域の稲の品種をもう少し詳しくみれば、蘇州・松江・嘉興・湖州の品種の同一、一体性が強いのに対し、北部の常州・鎮江・応天、南部の杭州・紹興・寧波は、やや差違がでてくる。その際、糯米は、比較的品種名称が一致するようであるが、それはこれが酒米用として醸造業の原料として取り引きされたためと考えられる。ただし、糯の品

種名が共通性を持つのは全国的傾向でもある。また、南部の紹興、寧波地区には秈、占城稲の品種が多くなっているようである。しかし、それにしてもこの(I)の地方の地方志物産が稲の種類や品種を具体的に載せていることは特筆すべきで、稲が秔であれ、糯であれ、商品作物であるという性格から品種の識別区別が重視された結果であろう。粒が大きい、甘い、香が良い、白いなどという稲米の性格が重視された宋以後の伝統はより拡大され、強化されたものとみることができよう。

(II) **デルタ周辺**　宋元の両淮、江東路で、秈が多く栽培された地区で、明代はその傾向が一層強まっている。それにしても、秈や糯を中心として、下流デルタの品種名と一致するものも多くある。しかし、地方志物産に品種名が示されていないものも多く、稲作の商品生産化は今一つと言うべきなのかも知れない。なお、この地区は十八世紀以降、再び米作の中心となることは注目してよい。

(III) **江西**　南宋以降、秈が多く栽培されたと伝えられるが、明清期でもその傾向は一段と強まった。また、早稲種の栽培も多い。

(IV) **湖広**は江西とよく似た事情にあるが、当地の明代稲作は江西の影響下にあったと考えるべきであろう。それでも、糯には長江下流の影響があるものもみられる。

(V) **四川・雲南・貴州**は地方志文献が数少なく、はっきりしたことはわからないが、ここでも早稲、秈が多く、また糯米の栽培も盛んであったがその品種名は独自なものが多い。

(VI) **東南海岸**は、やはり早稲、秈が多いところで、中には長江デルタとの関係を示す品種名がみられる。また、江蘇・江西その他の地名を冠したものもみられる。浙江南部から福建にかけては、次の両広地区とともに早稲を二回くり返して、一年両熟・両収するものもあり、また山岳地帯で焼畑農法によるものもあった。福州府、泉州府を除くと、あまり品種の数が多くない。

(VII) **両広**　ここも史料文献の少ない地区であるが、東南海岸同様に、一年二期作地区である。ただし、(VI)地区もそうであったが必ずしも農民は一年二期作を選んだわけではなかった。旱災や風水害に対する対策的発想で栽培されたと考えた方がよいかも知れない。

註

（1）加藤繁「支那に於ける占城稲栽培の発達に就いて」（一九三九年）、「支那に於ける稲作特にその品種の発達について」（遺稿、一九四八年）（後、同氏著『支那経済史考証』下巻、東洋文庫、一九五三年。所収）

（2）周藤吉之「南宋稲作の地域性」（一九六〇年『史学雑誌』七〇の六）、「南宋に於ける稲の種類と品種の地域性」（一九六一年）（以上、同氏著『宋代経済史研究』東京大学出版会、一九六二年。所収。）

（3）天野元之助「陳旉の『農書』と水稲作技術の展開」『東方学報』京都第十九冊、二十一冊、一九五〇・五二年。

（4）古代・漢代以降の中国稲作の歴史については前記三氏以外に岡崎文夫「支那古代の稲米稲作考」『小川博士還暦記念・史学地理学論叢』一九三〇年、西山武一「中国における水稲農業の発達」『農業綜合研究』三の一、一九四九年、西嶋定生「火耕水耨について」『和田博士還暦記念　東洋史論叢』一九五一年、天野元之助「『火耕水耨』の辯—中国古代江南水稲作技術考」『史学雑誌』六一の四、一九五二年。斯波義信「南宋米市場の分析」『東洋学報』三九巻三号、一九五六年。華人の研究では、陳祖槃『中国農学遺産選集　稲　上編』一九五八年刊、及び同「中国文献上的水稲栽培」『農史研究集刊』第二冊、一九六〇年。等多数ある。

（5）以下、特に断わらない限り加藤氏の指摘は、前掲、「支那に於ける稲作特にその品種の発達について」による。

（6）実は、天野元之助『中国農業史研究』お茶の水書房、一九六二年の第一編作物編第三章「中国の稲考」及び、第二編栽培編第一章「水稲作技術の展開」もまた、加藤、周藤両氏の研究に、特に実際面から新知見をつけ加えることが多々あった。しかし、明清時代の稲の品種等は、未だ地方志等の調査が徹底していなかったために不十分と言わざるをえない。ことに、『欽定授時通考』等清朝文献で明代十六・七世紀の品種の叙述をするなどの問題点も感ぜられる。

（7）この地域区分は、かなりW・G・スキナーのマクロリジョン（大地域）を意識したものである。W.G. Skinner, Presidential Address: The Structure of Chinese History. *Journal of Asian Studies*, vol XLIV, No.2, 1985.
但し、四川と雲南貴州を分けなかったのは、史料文献の多少による。また、交通を河川水系のみで考えず、山越え陸路も考えるので、稲の地文学の結論はスキナー氏のマクロ・リジョンと必ずしも一致しない個所もある。

（8）『明史』食貨志、漕運の末に、
漕糧之外、蘇・松・常・嘉・湖五府、輸運内府白熟粳糯米十七万四千余石、内折色八千余石、各府、部糙粳米四万四千余石、内折色八千八百余石、令民運。謂之白糧船。（漕運の外、蘇州・松江・常州・嘉興・湖州の五府は、内府に白熟粳糯米十七万四千余石、内、折色八千余石、各府、部に糙粳米四万四千余石、内、折色八千八百余石を輸運し、民をして運ばしむ。之を白糧船と謂う。）
とある。

研究は、戦前の清水泰次「明代の漕運」『史学雑誌』三九編三号、一九二七年、以下、星斌夫「明初の漕運について」「明代糧長の漕運における役割」等『明代漕運の研究』日本学術振興会、一九六三年、梁方仲『明代的粮長制度』上海人民出版社、一九五七年。呉緝華『明代海運及運河的研究』台湾中央研究院、歴史語言研究所、一九六一年、等。

賦役制度史との関係では、山根幸夫『明代徭役制度の展開』東京女子大学学会、一九六六年。川勝守『中国封建国家の支配構造』東京大学出版会、一九八〇年、濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』東大出版会、一九八二年。森正夫『明代江南土地制度の研究』同朋社、一九八八年、等。

(9) 以下、特別な場合を除き、同一品種名は前出の番号①②等で示す。

(10) 天野元之助『中国農業史研究』三〇一頁。